

K-27

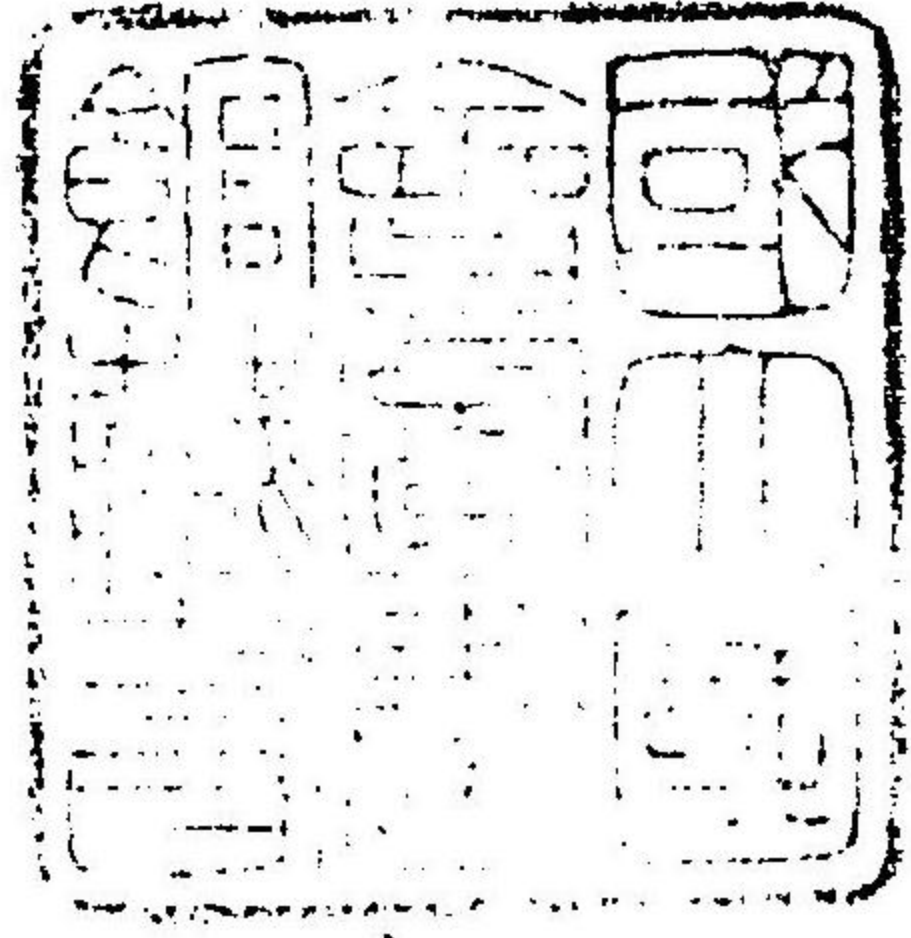
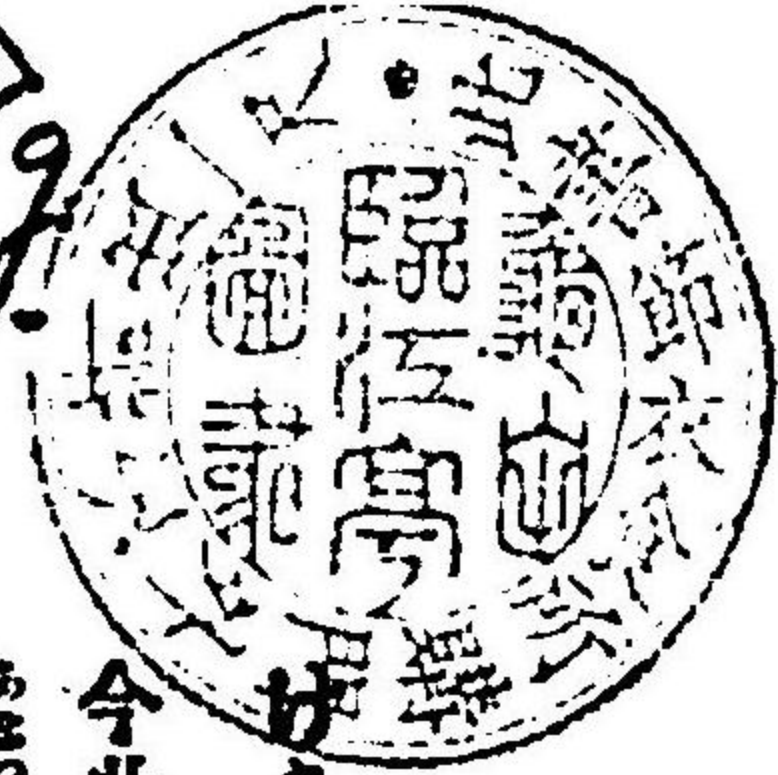
912.4

Ti 238g

源氏鳥帽子折
蟬丸

近松門左衛門
武藏屋藏版

912.4 T: 2389



336878

源氏烏帽子折

元禄十二年正月言初興行作者四十七歳 近松門左衛門作

けう風ゆるく吹てとうじつおごそかに輝やき。春雨なよめに洒いでせいゑん花と粧ひす。
 今此時のや四ッの夷八ッの隅春も閑に立浪の。後白河の法皇こそ別て目出度き賢王なれ。
 天津御國と二條の院に譲り與へれしよし。玉体安く仙洞に遁れおりさせ給ひながら万機
 と後見政事聞へさせ給へば。道ある御代と百敷や。袂豊に初ざしき治る國の兆なる。既に
 平治二年正月七日。武臣安藝守平の清盛院參し。先新春の御慶と奏し。別て當年の目出度
 き事のみ候べし。御喜悅の表し御座候。其故の源氏の大將左馬頭義朝藤原の信頼に與し。
 天下と傾けんと爲し所に。舊冬清盛待賢門の戦に打勝。義朝の野間の内海長田と頼み罷下
 り候所に。長田譜代の下人なれども勅命と重んじ。當月三日に終に義朝並に鐙の鎌田と討
 取候段。神妙に存じ長田の庄司忠致。同じく太郎忠澄召連れ參上仕る。義朝が首の穢と憚
 り。源氏重代の太刀物具白旗と切取て。是清盛が御年玉國安全に治るも。一張の弓の勢ひ
 たり。東南西北の敵と易く平げん法皇大さに御威あり。清盛と中納言長田の六位の主將に

源氏烏帽子折

補せられ。重ての院宣に。義朝が事の先祖満仲より累代忠勤の功篤しと雖も。此度思はずも朝敵信頼に與し。不覺の最期不使なり。内大臣の正二位と贈官し。朱雀の寺に標とたて追善有るべしとの御氣色にて。猶も長田と御階近く召れ。汝朕が命と重んずと雖も。正しく主人と舞と討事天罰輕きにあらず。其罪と償いんには義朝が思ひ者。常盤の前と云ふ女。幼き子供有りと聞く。尋出し守育て切ての恩と報じなば。妻子と勞る志草の影なる義朝も。誓と忘れて自然汝が冥加と成べきぞと。漏る方なき院宣の惠の賤が伏屋迄。實に明王の盛徳に譬へて言ば。此春の民こそ御代の心なれ。つま木に取殘されて有ながら。憂の變らで常盤木の。浮世の力落葉ふる。下の醍醐にしるよしして忘れ形見の涙の種。義朝公の餘り三人の子になぐさみ、今若の九つ乙若の六才扱牛若の三才にて。未乳離れぬ懷中に包む涙の世も狭く。宿も棒に埋れり。悼しや今若父の別れの涙の隙。竹馬取て打乗り。歎き給ふな母上様。追付某平家追討の院宣と蒙り。まづ此如く馬に乗り大軍と引卒し。父の敵清盛と討取り今の事。源氏の大將今若が武者振御覽候へと。庭の面と二三遍乘廻して立給へば。乙若小弓に小矢と短赤き絹と細枝に掛け。彼こそ平家余さじとよつ引て兵と放

ち。嬉しや平家と射留しと勇み給へば牛若の。母の膝より這下りて彼赤絹と。すんく引ささ喰ささ兄弟三人打喜び。平家の赤旗討取り。勝鬨揚よるい〜かうと手と拍いてぞ笑ひる。此人々の二葉より斯成こそ道理なれ。成人の後六十余州と靡のせ源氏の光と輝のせし。右大將頼朝蒲の冠者範頼九郎判官義經との此兄弟の生先なり。常盤夢とも辨へずなふ恐しや壁に耳。弓手も馬手も平家方源氏の一家の皆亡び。有るに甲斐なき世の中に若も平家へ漏聞へ。如何なる憂さの重ぬべき。今日より左様の悪戯せばコレ。つめ〜するぞとたいじよだて牛若と擁抱さ。今若も乙若も今日は何とて手習せぬ。未だ手本のあげざるの早々寺へとの給へば。あつと答へて惜〜と編笠被さ手と取交し。立出給ふ後姿常盤御前に見送りて。可憐の有様や頭の殿の在まして世が世ならば供人よ馬よ興よと云ふへきに。一僕とだに伴させぬ彼が源氏の惣領の。成る果のと斗りにて。伏沈みてぞ歎ひる。然る所へ長田親子大勢引俱しとつと入り。夫こそ常盤余すなと牛若諸共引立る。常盤御前の聲と上げ長田との己が事の。主と殺し婿と討つ非かく非道の罪人よ。汝の鬼薔の木の石の妻の命惜のらず。子供と助け得させよや。一ツの其身の祈禱と前後不覺に泣給ふ。

長田打笑ひ。尤も帝より妻子の宥免との仰なれども。清盛公より根葉と枯せとの御意と蒙る。今若乙若と出せ。然なくば命と取ぞといふ。己が心に引當て卑しくも云たりな。自己も牛若も殺さば殺せ。今若や乙若が行衛の言じと叫ばれるれと聞入もせず擲め行く。神や佛も無きよのと淺間しくこそ見へにけれ。是の扱置。爰に比企の藤九郎盛長とて源氏重代の勇士なりしが、去ぬる保元の合戦に父と討せ。幼少より流浪して北國に漂へしが。力強く背高く今年既に十九才。源氏亡ぬと聞くよりも夜と日に繼で都に上り。七條朱雀義朝の御墓所に參らる。向ふと見れば我年ばいなる若者の。直垂袴に太刀佩て編笠傾ふけ。盛長としろくくと。熟視する。盛長不思議と能く視れば古への寺友達義朝の膝元去す澁谷の金丸幼顔疑ひなし。彼奴の義朝の御最期迄御供と聞きけるが。長田と討すして逃來る卑怯者。詞とくくるも無益なりと見ぬ顔して。御墓に花奉り水手向生たる人に云とく口惜き御有様や。人らしき侍が切て一人御供せば。斯く聞くと成給ひじ。金丸とや云ふ柏丁稚臆病者の腰抜の。人でなしと知り給はず頼みに召連れ給ふへ。不覺の御最期是非もなしと堪忍ならぬ當言し。屍目に睨む眼より涙と流し申ける。金丸丸むつとせしが左

みらぬ体にて香花と捧げ。卒都婆に向つて口惜の御有様や。某が諫と御承引なく長田に心と許し給ひ。果敢なく討れ給ひしよな。當座に腹切て冥途の御供と存せしものども。いやく死の易し存生へて今一度源氏の御代と翻し。御耻辱と雪んと斯の体にて候へ共。若君達の御幼少。御家人どもの散々に成り有る甲斐もなき藤九郎盛長と云ふ素丁稚。浪人して魂くたり。口先の廣言斗りにて臆病者の大腰抜。何の役にも立申さず源氏の御運の拙さよと。同じく屍目に睨付く詞と荒し申けり。盛長又御墓に向ひ。石塔に耳なく卒都婆物言ねばとて。抜ぬ太刀の高名腕なしのふりすんばい。草の影にて左ころ可笑しく覺されん。死と易しと申せども命と捨る程ならば。長田奴に初めあらじ。討に討れぬ事や有る。然ながら武士と思へば恨みも有る。牛馬に劣りたる人外と思し召せ。本意の某遂げ申さん未來の忘執晴れ給へ。南無阿彌陀佛と云ひければ。金丸又御墓に向ひ。玉子の中にも巢もり有る尤もな。親兄弟の兵に似たる方なきそんはづれ。夫程心剛ならば。去ぬる合戦に今の口はどなど高名のせざりしぞ。合戦と言はば逃足早く。爭論過ての棒ちぎり木後の廣言腹の皮。逃吠の犬侍臆病くくとぞ笑ひける。盛長今の堪へ兼犬侍との誰が事ぞ。

金王聞さも敢ず。又最前より其方が人外との誰が事ぞ。テ、澁谷の金王が事よ。テ、犬侍との御分盛長が事よ。盛長腹に据のね。侍と捉へて犬侍とい如何に今一言云ふて見よと太刀に手とりけ言ければ。テ、侍とい人がまし。無益の太刀と扱んより犬に似合た尾と振れと云ふ。おのれ侍ならばなご主の敵長田の討ぬ五穀つよしの娑婆婆娑げ。末と大事に思はずばれのれと爰で死ぬべきに。命が二ツ欲しいな。テ、我も源氏の御末と貢ぐ者の有るならば。御分と爰で死ぬべきに。命がも一ツ欲しいな。テ、悴め美事我と死ぬべきさ。テ、死にのねふの、テ、討のねふの。誰と已奴めと。討たいな切たいな。無念さよ口惜やと。兩方りさむ居合腰太刀の柄も擡げよと。搦りひしぎ身と慄し。互の心探りあひ兩眼に血筋とはり。齒と鳴して睨み合擬勢の程を頼もしき。盛長のうらうらと笑ひ。テ、言甲斐なき狼狽者と死して益なし。名將の御慕と腰抜共に回向させ。勿体なしと云ふ儘に一丈有余の高卒都婆押取て出ければ金王續いて飛掛り。君の標の渡さじと確と取て引留る。日本中古兵揃に選れて大力と名にふれし。藤九郎盛長博多王の怒となせば。源平の其中に剛力の聞有。澁谷の金王昌俊獅子王の力と出し。るいやくと捻あへば腕骨膝骨腰の骨。つがいくの唐紅血はしつ

て飾あがり。頸の筋の脛へ下り脛の筋の頭へ上り。五百五十の力瘤九重の腫高。松とらんで苦むせる巖に生し如くにて。二人踏たる足の下土五六寸窪ぼみ入り左手もちり右手違ひうんと云ふて捻ければ。四方八寸の角卒都婆中よりふつと捻切て小踊してばつと退き。雙方睨んで立たるの人間業との見へざりけり。暫時詞もなかりしが一度に涙とはらくと流し。テ、頼母しし金王丸。心底現れたり嬉し。疑ひし口惜さよ。許してくれよと言ければ。そちが心も見届たり頼母し。最前の雑言も忠節の余り。許せ。此上の心と合せ平家と亡し。頭の殿の齋憤と休め申さんが。思へば拙き源氏の御運口惜くの思のぬる無念にの思のすや口惜や無念やと。卒都婆投捨直と寄り袖とくに縫り付。怒れる顔面引のへて悲嘆の涙の堰あへぬ。眞の姿を哀れなる。然る所に六波羅の方より雜式警固邊と除ひ。囚人なりと罵り来る人々木影に立隠れ。能く見ればこの如何に常盤御前に牛若抱らせ。敷草に引据へ武士四方と取廻し。長田の太郎の太刀取にて瀬尾の七郎檢視と見へて。コレく常盤最早最後の極つたり。去ながら清盛公の御心に従ひ給ひ。三人の若と助け御身の望も叶ふべし。一生の思案所いらくと言れば。常盤涙の隙よりも。テ、自らの女な

れども義朝の妻なるぞ。狼狽事ばし言ずとも早く首打て。彼長田めに喰付て本望と違せん
と。飽に氣高き外皆にてはつたと睨み。はらくと涙の玉と貫けり今の是非なし首打て長
田承るも慄ひ聲。膝わななくと後に廻り。太刀振上んとせし所と盛長金王飛で出。長田が
胸板蹴倒し主君の冥罰思ひ知れと。首播落せば警固ども狼狽者と立騒ぐ。鎗長刀と追取々
々朱雀の野邊の草の原。露と亂して切結び切解き追ひすび。數十人に手と負せ八方へ追散
し立返つて。さあ〜〜常盤御前の子供と俱し大和路へ落給へ。日本國の平家方此金王
の姿と變へ。土佐坊昌俊と名乗密に勢と集むべし。出来た〜〜某の關東へ馳下り武藏相摸
伊豆駿河上野下野安房上總。源氏譜代の兵どもそれにても叶すば。八丈大島蝦夷松前鬼が
島へ押渡り。猛虎猛威の鬼と集て軍勢とし平家と易く亡さん。尤々と約束堅き石塔に眼
申て立歸る。風神雷神厄神も取ひしぐべき威勢の。鍾旭大臣獅子王の暴たる姿も斯くやら
ん

第二

前の安藝守清盛の御前に。嫡子重盛宗盛と始め一門残らず伺候有り。未だ源氏の末類と
も方々に忍び居て。常盤親子と奪ひ行き。利さへ長田の太郎と討取る事。如何なる大事の
仕出さんと評。詮眉とぞ擧るる時に重盛申さるゝの。たとへ源氏の末類神にもせよ。大將
義朝と亡す上の日影者ども寄集り。たやすく平家と亡す事及びがたし。されば易に曰く。
亢龍悔有り滿れば欠く。此殘黨と討れん事事と好むに似て候。只義朝が三人の子供と密に
捜し出されて。流罪せらるゝ迄に候と穩便に宣へども。清盛怒甚だしく常盤の前の子供と密に
子供幼少遠く往じと難波妹尾と大將にて。三百余騎の追手と方々へこそ差向らる。扱
又彌平兵衛宗清に仰付。不思議の者と擧捕と在々郷々町小路。殘なく觸ければ當時平家の
威勢に靡く草葉の影にだに隠るゝ方の

常盤御前道行

頃の正月の末つらた春めきながら牙のへり。袂の氷柱とき知らぬ常盤御前の常盤木の木の
下關に踏迷ふ。夜深き空や世にあらば今ぞ妹背の寝入ばな。今朝のつれなくひく起に。抱
き膝して牛若の夢とば母が懐に。泣寝入せし可愛さよ。今若のふとなしく。吾妻のらげに
脚絆締め乙若の手と引て。先に立たる歩みふり。小太刀佩たる腰付も。宛ら父の御影のと

涙に涙果しなく。しのびつけたる顔くせや。最ど傾ふく笠の雪。打拂ひつゝ見渡せば。暇が門田に蕪摘む。東寺よつ塚鳥羽繩手。諸國の秋と積のせて。御世の眞の牛車京の名裂に森のば我が心も打棄せて送れ見送れ呼返せ。返らぬ水の泡沫初歌謡ふ初蛙。梅に年とる鶯の翼は雪に疊まれて。また片言の初音鳴く。そのがさまと春なれや。人の姿も若緑竹田の里に来て見れば。苦屋が軒も飾繩はなが標。えぼしにわけて門松のけの小敷や。ありけう有ける新玉の年も若やく巨より。水に和く柳の芽む。里も榮へまします。万歳鳥追とりとくに春の賑ふ。折のらの厄神參厄除。參る氏子の二ツ三ツまた一ツ身の縫あげに。源氏將來子孫繁昌神聖うれと。石の華居の二柱二人の親の家土や。小弓に添し八幡山道すがらの參詣と。今若の御覽じて是ぞ源氏の氏神に我門出の吉相と御手と合せ給ひければ。兄と見まねに乙若も半若も。母君の乳房の上に手と合せ。さそうくと愛らしさ父義朝のましまさば。如何に悦び給ひなん。類なき若共と母が袂の下にのみ埋木となすべきのと。昔と暮ひ行末と思へば盡ぬ憂涙。我身一つの雨ぞらし。古へ人の浮名たつ。戀の百夜の深草山あまざる。雪に雲暗くまた朝明の心地して。三里に足ぬ玉鉾も草鞋凍り足こへ。

雪にもおなじ墨染の櫻の寺の晩鐘に。宿のなけれを里の名の。伏見に行くれ給ひけり。降る雪の音聞く程に静なる。竹よりとくの一ツ庵猫の通路跡付し。唯一筋の道細く。油火はのりに振立て女の葉のしどけなき。引さき紙と結びつき。半上たる伊豫藤原を雪もて来る。常盤御前の灯火の影と便りに尋寄り。大和へ下る女なるが。幼き者と召具して雪に道と失ふたり。一夜の情と有ければ。十八九なる女房の紙燭のあげて襟に出。親子の人とつくつくと打まもり。悼しの有様やお宿申たうの候へども。此比平家の沙汰として義朝の所縁とつよく詮議の候が。人々の有様答ゆんの必定なり。自の白妙とて藤九郎盛長が妹。源氏譜代の者なれども。不思議の縁にて平家の侍。彌平兵衛宗清の忍び妻になり候。今にも夫の宗清殿来り給は。愛目とこそ見給はん情なしとな思召そよ。妻がつらさの尤愛さもへ。何國へなりとも落給へと。いと念比の詞の色紙燭吹消し入にけり。常盤も今の頼みきれ。力も落て先へも行れず。後へとて戻られず。とても此上の運に任せて兎も角も。今宵は爰に明さんと少し風避軒蔭に。小袖の襖のうながへと敷敷の床と片敷せ。笠と并べて屏風とし昔の翠帳紅閨に。隙間の風も寒うりし身のならしと身と捨て。兄弟に降る雪と

打拂ひく。襦帛ふ小夜千鳥。泣て其夜と更さる。間なく隙なく心なく。雪は溢すが如くにて。寒風颯々として烈しくて。人の肌骨に染渡り肌と刺す事鋭き刃の如くなり。悼しや母上は勞れたる身と寒氣に破られ。惡寒五体と苦むれば。堪がたやと伏轉ひ前後不覺に見へ給ふ。今若乙若驚き嗚如何にせん悲しやと。額と押へ手と按りいかに乙若母上の寒あらんに。物着せません尤も兄弟帯解き身狭なる。小袖と脱で母上の裾や枕お取重ね打重ね。我は厭げで埋もる。雪の裸身哀れなり。母は苦き枕と上げ。扱悼しの子供やな。斯ばあり母と大切にいかに孝行なればとて。和御前達と凍へさせ。親も冥加に盡るぞとよ。子は息才に生立て見するを深き孝行なれ。風邪はし引な衣着よと着すれば脱で母に着せ。いや我々は寒のらす。侍のならひには如何なる雪にも戦して。能き敵と組ん時寒し冷たしなんととて。敵に背と見すべき。寒いと云ふな乙若よ。寒いと覺すな兄上と甲斐くしげにいふ聲に。牛若目醒し這出て見る。見真似に衣と脱ぎ。同く母に着せまいらせ。手足も慄ひ凍ゆれど其色見せず齒切し。拳と握り耐ゆる体母は氣も絶へ目も眩み。情なや淺間しや百万余騎の大將軍とも仰るべき若共に。一重の衣と着せぬるは如何なる神の谷ぞ

や。可憐の人達や御身達が。志綾錦より厚ければ母は若ねども温なり。不便の者よこち寄れど三人一所に怪寄せて。抱き伏して泣給ふ道理とこそ聞へけれ。月も夜半に更行ば彌平兵衛宗清。女の庵に忍びしが雪に映る人影は。何者の怪しやと傘のさし能見れば。常盤親子に紛ひなし。綱代の魚ごさんなれ餘さじと身づくろひ。猶も事と窺ふにぞ慈母の哀憐孝子の振舞。流石源氏の根さしなり悼しきよ憐さよ。今人々と助けしとて。源氏の運の末ならば終には捜し出さるべし。假令擲捕たりとて。盡んず平家の御果報の長久にもよもならじ。情知ぬは匹夫のよう殊に我妻の爲には主君なり。彼是助けて落さんと思ひしがいや待て暫し。主君清盛の御眼鏡と以て仰と蒙むり。助けては道立す擲捕ては情なしとどつゝ舞の思案して。左あらぬ体にて戸と叩けば。女房待らね柴の戸の雪打拂ひ。草鞋もどくく庵へ伸ひける。今宵は殊なふ冷さふらふ先盃と温めて。暫く差つ差れしが女房申けるは。なふ宗清殿。自は源氏御身様は平家。若只今にも義朝の所縁とならば。如何し給はんと他ながらこる裏聞けれ。宗清扱ころと思ひ。云ふまでもなし。主君清盛の仰なれば。如何に汝が主なるとて用捨はならず。眼に懸らば擲捕て六波羅殿へ引立る。只何

事も見ぬが佛聞ぬが花と答へまが。親子の人々物ごしの手に取る様に聞へしと。女房はつと思ふ顔。宗清氣とつけやれ小鳥共の軒に宿りて驚しきに。あれ追拂へと云ひければ。なふ情なやふぐら雀の羽と惱み。雪に折れ伏す篠竹の笹に一夜の假の宿。左のみに太くなの給ひと。はや夜も更ぬ床寒し音せでお寝れと勤めける。いや〜某は殺生好。鳥の聲と聞は捕ではおろす。是非追拂へと云ひければ。女房更に合點せず夜なく泊る小鳥なれば。追ても打てもたぬといふ。宗清しんさと沸し、不合點な。いで某が追退んと弓矢取て駈出る。女房は人々の影隠さんと引留る。換放し突退て空矢四五本差詰め〜射る音に。常盤鷲と兄弟と前後に怪抱さ。はふ〜遁退さ給ひける。宗清驚と見送りて。あれ見よ女房雀共が通つるは。其儘置て某が殺生し。あの雀と殺させて汝が忠節立べき。只何事も見ぬが佛聞ぬが花今合點いたると云は。女房左右の事もなく。あら頼母しやと斗にて袂に縫り歎さしが。扱過分なる御心左右詞に及れず。連添ふ男に目がくれて。主殺と云れんも一門の名折なり。又おの様に逆ひても本望にも候はず。如何と案じ頼とれしに有難と御了簡。斯斗深き御恩賞親にも子にも兄弟にも。七万貫の資にも男一人は換ぬぞや。若君達も

常盤様も此恩忘れ給はしと。いへば〜暫く。常盤と云る名と聞ては。清盛公の御前にて某が誓文立す。いつ迄も雀々見ぬが佛聞ぬが花と。領さ合し弓取の妹脊のわけを頼母しき。藤九郎盛長は人々に行逢しが宗清が放つ矢は妹が二心の不審と。庵に立ち事の様と聞届け。横手と打て涙とはら〜と流し。爰明け給へ宗清殿。是は白妙が兄源氏の郎等藤九郎盛長にて候。心底に依て妹と刺殺し。御邊と勝負と決せんため是迄は来りしが。只今の志生々世々に忘れがたし。一禮の爲對面せんと云は。宗清うら〜と笑ひ。又斑替の雀が来つて由なき事と嘲るよな。某平家の扶持と蒙りながら。源氏方の禮と請此宗清が立べき。狼狽たの羽抜鳥。左手も右手も狩人のおひ鳥狩の網高し。鷹に捕るな餌差にされな。古柵の雛と飼育て初音揚よと云ければ。盛長悦び合點し。頼母し田面の雁。春は越路に立歸り源氏一味の友千鳥。大將軍の羽翼の下揚たる雛は白鷺や。群居る鳥の翼と鳴し會稽の巢立して。上見ぬ鷺の譽れと見せん尤々急げや急げ山鳥の尾の長尾の。長居は恐れお暇と夕告の鳥が啼く。吾妻路指して飛鳥の飛が如くに下りける。心は流石大鵬の千里一翔源氏の運。未たのもしうぞ聞へける

實や三百六十日曆々と巻盡し。既に承安三年と移る月日は程もなし。平家の驕奢日に榮へ清盛既に太政大臣と經て入道し淨海と法名ある。嫡子重盛内大臣。二男宗盛中納言右大將其外末子末葉殘らず稀有の官職。攝家華族に異らず。爰に三條烏丸烏帽子屋五郎太夫とて。烏帽子折の上手と召し。位々の烏帽子冠言付れば。則ち出來致せしと西八條に持參する。一門喜び若し給ひ御喜悅事終り。五郎太夫に祿給り清盛入道仰けるは。先年義朝が子供討て捨べりしと。池の禪尼の申に依て命と助け今若と。伊豆の國蛭が小島に流せしが。密に元服し右兵衛佐頼朝と名のり。當家追討の院宣と乞望ひ由風聞す。又弟牛若も成人し京近邊に忍び居て。院宣と望むと聞く然ば頼朝も牛若も法皇より。密に位と賜はり烏帽子冠。求めんは必定なり。隨分氣と付見馴ぬ者烏帽子買んと云ならば。早速に注進せよと宣へば長田の庄司進み出。これ五郎太夫。荷の事ならず油斷なく詮策し某迄知されよ。此者共と注進せば御褒美に與り一代浮み上る事。長者になるを精出せ。何が扱く身の爲といひ。御奉公油斷は致さず候と。御請と申罷立宿所にこそは立歸れ。春の光と烏帽

子折五郎太夫が一人娘にしのでとて十五才。職人なれと烏帽子屋はお公家交はり上びたる。しよさいに連れて氣もいたり都は戀の名所とて。自然なる伊達心町には惜き姿なり。今日は吉日商よし棚飾らせて賣物に。細工の仕初祝儀すぎ乳母下女と招き寄せ。春の遊びも今少し今日は羽子突遊ばんと。腰元呼て遣羽子や。彼方此方へつくばねの巻より落る瀧の白玉一二三より舞ふ小羽子。外へさるゝなそれもなく。羽子さへも袖に留りて情は。厚き羽子板の縁に似たる我中よ。夏瘦もせず蚊も喰ぬ年の數々面白や。住む甲斐もなき夜はつらし。半若君十余年の霜雪と。鞍馬の山に踏分て十六歳になり給ふ。秀衡と頼み奥州へ下らんと覺せしが。童とあらば平家より掬め捕との沙汰さびし。元服して男になり下らばやと思召。都三條烏丸太夫が店に立寄りて烏帽子買ふ。なふ烏帽子買んと仰ける。女子共聞もあへず。飾りたる烏帽子の内何れの所望候ぞ。能も悪きも空價なし。望次第に召れよとはも無く答ゆるにぞ。早しのめは牛若に曳れて廻る戀車。別なき思ひ色に出なふぎとつなの人々や。商賣といふ物は賣にも買にも品ぞ有。御用あらば妾にとちよとどお傍に寄り。烏帽子は何が御所望ぞや御容色はよし屋はよし。見る人我とや折烏帽子戀に意氣地

と立鳥帽子。此お姿に譚知ぬ我も心と懸鳥帽子と脊中とどんと現なや。しんきと斗言差して顔差入る襟深し。牛若君も色馴ぬ鞍馬の山の深山水の。花珍しくむづとれにくはつと癖らむ顔とあげ。飯に優しき詞の縁今日が情の初冠り。あはれ人目のすき極風折鳥帽子折もかなと手と取給へば。しのゝめも魂も揉鳥帽子。懸緒の紐の双結び解ぬ思ひとなりけり。斯る所へ五郎太夫立歸り。こは何事と問ければ。娘は慌てゝうるゝと鳥帽子召れよ父上と太夫が頭に被らせて。痕初廻る笑しさよ。太夫牛若と一目見てして遣たりと腹とも立す差爾と笑ひ。お若衆は鳥帽子が御望みる好はなきのと問ければ。牛若聞き給ひ扱は御亭主候な。此章が若よふする鳥帽子は大鐘の願と荒らるに一刻せみくせませ。ひなるたにあひとあらせくしがたといのゝと。雙肩付て左折が所望と有る。太夫案に違ずと思ひながら。猶も試見んと思ひ。おら似合ぬ好事や。當代左折と召れふする人は。一年野間の内海にて失給ひし左馬頭義朝の。其御子源源太義平。二男朝長三男頼朝。扱は鞍馬におはします牛若殿とやらんこと。左折は召れふすれ平人は及びなし。但少人は由緒ばし候る牛若笑しく思召し。身には系圖の無れども若も咎むる人あらば。都の宿に古き鳥帽子の有つると

。所望して着したり。左折も右折も此冠者は知ぬなりと。ぬぎ捨て通るならば御身の難も有るまじ。童が科も脱るべし平に所望と仰ける。五郎太夫は仕済たり牛若に紛ひなしと心の内に祝ひ。其義ならば出来合は候はず。今宵の内に折立させん一夜は是にと云けれども。いや只明日參らんと立出給ふと。しのゝめ袂と引留て父もお宿と申さるゝことを幸なれ。鳥帽子も折て御祝儀も取はやして參らせん。是非にとあれば牛若も情の糸に繋れて。岩木に有らぬ風情なり。太夫彌笑と含み。でういたしのゝめ年の始の商旦那。随分御地走申せやと口には云て心には。たつた今擲捕牛若殺して牛のした。大判小判の擲取と山も見えぬ胸算用六波羅指てぞ急ぎける。いつの間には誰掛橋の思ひ川。早宵の間に深くなり。漏さぬ水は合惚の淵も磯とを契らるゝ。其夜も深てしのゝめは左折に小結とひ。御鳥帽子出来たり自は殿始。かの様は鳥帽子始目出度く圍にて御祝儀あれと。瓶子に盃取副て御前にこそ直しけれ。牛若御覽じ扱々嬉しき情の程。今は何との包み申さん。某は左馬頭義朝が八男牛若九。平家と亡し源氏の代となし此思は報すべし。去とても代にあらば日本國の諸大名。祝ひの色となすべきに。口惜の次第やと御落涙ましませば。扱は左様に候の。

御悼しうころと斗にて共に袖とを絞りける。牛若重ねて我先祖義家は。八幡にて元服有り。八幡太郎と名のり給ふ。我も是と形取て烏帽子親は正八幡。鞍馬の大悲多門天。太刀と刀と八幡多門と観念し。床の柱に立置て我と烏帽子と取て戴き。太刀の前にも三々九度刀の前にも三々九度。直に土器頂戴し。扱名は何と付べきぞ。九郎冠者源の義経と付申さん源氏の御代は千秋樂万歳樂と繰返し。獨言して言る、御有様こそあはれなれ

烏帽子折名づくし

しのめ情々見参らせ。御元服と祝はんと奥の一間につゝと入り。兼て用意や仕たりけん。數多の烏帽子掛に様々の烏帽子と着せ。色々の装束と打掛人の如くに拵へて御前に並べさせ。なふお目出度や關八州の諸大名御味方申さんとて。手勢くゝと引供して御祝に参りたり。末繁昌の其兆御酒一ツとぞ祝ひける。牛若殆ど御悦喜あり。實に珍しや面白や。願もしや東路は源氏好の梓弓。取傳はりし武士の家名は如何にとの給へば。姫は烏帽子と打被き。是は伊豆國北條の四郎時政。一門榮へ類擧し。數ならねども某が御味方と申さんに。凡そ近國に残る武士は候まじ。手勢は限り知れずと謹んでこそ申けれ。次に座せしは梨

打烏帽子。直垂着流し太刀佩て。さも大様に見へしは如何に。さん候某の烏山のなにかし秩父の庄司重忠。若武者の昔より力業と好んで。大船と跳返し龍車と留むる勢有り。四相と悟る自然智は我さへ。卒や白露と玉と欺く謀。座乍ら万里の敵と察し。戦はずして勝利と得。天地と動し鬼神と感せしむるなる。文武と雙の翼の臣。手勢合せて六万余騎御先手とぞ答へける。續いて并居し人々は。懸烏帽子に大紋の袖たぶくゝと拵合せ。左も更々しげに拵ひしこそ土肥の小山の梶原の。其名懐しとの給へば。抑是は宇多天皇の後胤佐々木の太郎。同姓次郎三郎盛綱。四郎高綱五郎吉清候なり。次に伺候す風折烏帽子。後高に着なしたる。本國家名はいのゝに。是こそ三浦の旗頭。和田の左衛門義盛年積つて六十六。軍に逢ふ事十五の度。一度も不覺の名ととらず。老木の枝は撓めども心の櫻華美に。榮へん君の御出世と千代万年と壽きて。九十三騎の類ども召俱し参上仕る。末座に扣へし懸烏帽子。素襖袴に大太刀佩き。殊に勝れて見へたるは。是も三浦の二黨ならめ。實に能御覽じ候ひし。我義盛が三男朝比奈の三郎義秀。色黒く手足われ。墨觸の荒男。茶の湯連歌は不得手なれども。朝比奈が癖として敵と見て勇む事。荒鷹が雉子と見て烏尻

と潜るに異らず。假令平家黒鉄の城と構へ石門に籠るも。片手に捕て押殺り。清盛父子と初とし撫斬嗣斬排ひ斬。將恭倒しに攻亡し。源氏の御代と爲し申さんと。辨舌によきみなくそれくくに答へしは。深よくころ聞へけれ。爰も長田は五郎太夫が注進にて其小冠者何事のあらん。板垣して討取んといさりきつて來りしが。障子の隙より遙に見れば。烏帽子直垂若流して大の男數十人。和田よ佐々木よ朝比奈よと云ふ聲に。長田の庄司はつと懦慄氣と失ひ。空恐しく胸慄足も腰もわなくと前後と忘する斗なり。太夫さつと見法れ給ふの庄司殿。踏込で一討に遊ばせといへば。那と見よ鎌倉勢が雲霞の如し。此方が細工にならぬと云ふ。太夫驚き覗きて見れば案のこく兵數人列座せり。あつと言ふより慄出し。二人はひよろくうろくうろくと慄ひて何の埒もなし。何處にての金王丸此由と問出し。飛が如くに駐付案内まうと呼はつて二王立にぞ立たりける。長田味方と心得駈出て見れば金王なり。へ南無阿彌陀佛と地に俯伏穴へも入たき風情なり。太夫奥にうる付しと飛掛て確と捕れば。長田表へ逃んとす同く取て伏する間に。牛若姫諸共奥より立出給ひける。太夫聲とあけ我等は何も料は無し。烏帽子が御用に候は、おまけ申さん。召ませひと慄ひく

言けると。某が烏帽子は。黒鉄の五枚兜鍬形うつて龍頭。鞆の付たる烏帽子が所望ぞ。己助くる者ならねを娘が心と察し命斗は助ると。腰骨さうと踏おれば泣々るざり助りぬ。是長田。某は今法体し土佐坊昌俊と名乗るも。金王丸と言し時己奴と漏せし無念さに。其時の姿と殘し四十になる迄此前髪。今ころ落せ是見よと。附髪假髪と取しより土佐坊とこそなりにけれ。今殺すは可惜物關東へ速下り頼朝の御前にて。弄殺にすべしとて高手下手に御付。源氏御出世今日の御祈禱に千秋万歳所繁昌。壹指舞ふ目出度やと。三番さの烏帽子と着し袖と替して。とさへてく。思ふ敵と取て押さへて源氏の御代より外へは遣じと思ふと。若君と祝ひ参らせ。どうく東へ御下りおはしませ。扱某は都の様体聞つくるひ跡より退付奉らんと。勇に勇る有様は只焚喰も斯やらんと。恐れぬ者こそなありけれ

第四

彌平兵衛宗清は。妻の白妙源氏の由縁有ゆへに。頼朝兄弟の命と助け参らせしが。其身平家の譜代なれば生中に事むづろし。源平別ち立違ひ暫く身と退き。世上と見んと去年の秋

より病氣といひて奉公ひら。養生の氣晴しとて夫婦諸共京近く。野山廻れば自然心淨る、
瓢箪に。酒など入て腰に付觀音巡り寺社の様。花の下影行暮る其所と其日の極樂と。物に
搦ぬ身の樂は命も延る姿なり。斯る折ら十五六なる君達。しげ縫の大口に左折の小結着
て。直垂の袖にて顔隠し忍ぶ振にて通りける。夫婦急度目くばせし直と寄て袖とひらへ。
是申。御姿紛ふ所は候はず源氏の大将牛若殿と見掛たり。某は平家の兵彌平兵衛宗清。
申へき子細あり名乗せ給へど小聲になつて言ければ。少人聞も敢ず。某ころ牛若よ。定め
て我と探すらん今は脱るゝ所なし。はや首討て清盛に見せ。高名にせよと清しげにして居
られけり。宗清手と拍園生に植ても。紅の流石なる御舉働。全く君と討奉る心ならず。是
なる者は我女房白妙と申て御家來藤九郎盛長が妹。其由縁に依て先年御幼少の時分。伏見
の里にても御兄弟と見脱し助け奉りし。今とても某世間の稱も候へば。御味方こそ叶すと
もなぞや討取申へき。心易く落し申さんと云ば。少人聞き給ひ。然らば明て申べし我牛若
にて更に無し。烏帽子折の五郎太夫が娘しのゝめと申す女なるが。親にて候五郎太夫怒に
目くれ訴人せしと。澁谷の金王入道士佐坊の働きにて。若君も恙なく長田も生捕給ひしと

父の太夫が弟妻が爲には伯父坊主。吉峯の雷玄法師重ねて平家へ訴へ。監物太郎頼方が
手勢と以て。雷玄法師が加はり東路へ追手とゐくる由。妻は君が一夜の情。我牛若と名乗
追手に出合討れなば。其隙に若君様一足なりとも落給はん。親伯父の悪心も妻が露の志
と語りもあへず泣居たり。宗清夫婦感じ入其義ならば女房そちは此姫と同道にて。随分追
付御供せよ。某は爰に残つて追手の大将監物太郎に出合。長話と仕のけ邪魔といれん。其
間にはやゝ落せと言ければ。白妙悦び然らば妻も身と扮さんと。夫の羽織に編笠被さ。
しのゝめと先に立跡と暮ふて追駈る。案の如く追手の大将監物太郎手勢引具し走來る。宗
清急度見これくく。監物太郎頼方にてはなきの。遮しき体何處へ往ぞと言懸る。
頼方頼り。宗清の我は今日源の牛若が追手の役と蒙り。是なる訴人は烏帽子屋の五郎太
夫が弟雷玄法師。則ち彼が案内にて只今急に追駈る。其方は病氣とて樂とする浦山しと。
言捨て駈出ると先行てと押留め。夫は近比太義千万。去ながら侍は息災にて奉公すること
手柄なれ。随分ぼつおけ牛若と討留て御加増に預り給へ。幸酒と持おはせられたれば。門出祝
はん先一ツと腰の瓢箪取出せば。是は誠に氣がついたり然らばお辭儀申さぬと引受く。

我も三盃雷立も三盃御亭主も三盃。合せて三々々どうはお禮申さぬと又駈出ると。はて振監物呑込するは手が悪し。此比久敷參會せず暫時は積る物語。今少とぞ引留る監物重ねて。時も時折も折大事の追手に行く者に。咄せんとは譯も無い爰と放せと引放す。はてさう盛う言な新しき咄あり。ちよつと咄さん聞けと言。監物少腹と立て。泣く子も目わけ咄所。其方が様な隙ではなし重ねて聞んと逃てゆく。いや咄掛つて話さでは置ぬぞと。捻合引合留ひれば監物殆ど持飽み。さゆちやくくと咄さば咄せと。不肖顔にて聞居たる心意氣こそ笑しけれ。宗清どうと座とくみ是は大事の物語。夫なる御坊も軍兵達も聞給へ。武士たる者は後學と子細らしく聲作り。昔々或所に爺と姥と有けるに。爺は山へ柴刈に姥は川へ洗濯にと聞も果す。ま、爰な者はあまり人と阿呆にする。酒に酔たる宗清相手になるな軍兵共。急げくと振切て跡とも見ずして走行く。宗清聲とわけ大事の咄殘しふる先ささと聞け監物。猿の類は眞赤なと笑ひてこそは別れけれ。御曹子牛若は江州土山まで落延給ふ所へ。白妙しのめ追付て雷立法師が訴人にて監物太郎追駈申と。宗清道にて長物語と仕出さん。其間に一足もはやくと云ければ。牛若實もと祝ひ宿と出放れ給ひしに。此し

も春の雪氷解て流れて田村川。水嵩増つて波早く越すべき様のあらざれば。よし此上は如何せん運は天に有明の月のよすがら爰にとて。田村の宮の拜殿に暫く休らひおはしける。監物太郎頼方は宗清が長話。由なき隙といれけると足とも付す打ければ早土山に着けるが田村川の水高し此邊にこそ在つらめ。関さつくとて劫らし搜して討や者共と。十方に入亂れ関の聲とぞ揚にける。今は脱れぬ所ぞと。源の牛若九爰にありと駈出給へば白妙しのめ諸共に。弓手馬手に引添て面もふらず走向ふ。彼奴は兵衛天狗の弟子殊に荷擔人有りけるぞ。侮つて負傷するなと八十余人の追手の勢群つて掛りしと。三人飛鳥の身も軽く飛越跳越踊越花と亂して戦ひける。女わらはと言ながら一人當千の剛の者。入るへく追立れば。平家の兵切立られ戦しらんで見へにけり。雷立法師堪り兼牛若は免も角も。親伯父に逆ひたる女めこそ頼憎けれ。搦殺してくれんと大手と擴げて駈廻る。しのめ長刀追取のへ。是伯父坂樵友の手前も有どもし一門の懸心と。変化こそせられずとも月の訴人は何事ぞ。一子出家すれば才族天に生ると言ふ。御身は引のへ六親と地獄に落す大惡僧。ワ、結構な御出家。口惜くば寄て見よと長刀とひらめかせば。雷立甚だ怒と爲し懸心却て大善根

。事も知で出家と悖く己こそ罪人よ。塞の河原の石と神前のくろ石と。追取く飛礫打雨や霰と投のくる。しのめ長刀むねに爲し飛來る石と。はらくくはらうく切拂ひ。八方に打拂へば身には當らず飛返り。敵の眞向額口鼻筋首筋頭の鉢。さんくくに打割れわつと言てぞ逃散ける。白妙少換んと逃行く敵と追懸しに。頼方が郎等占部の新七取て返し渡合て切合しが。太刀と捨てむすと組ひ白妙莞爾と打笑ひ。女と思ひ侮るな盛長が妹宗清が妻なるぞ。主有る女に抱付はすこびたる徒者。生ては我が道立すと云より早く掻潜り襦取して跳返し。隙なく首と討たるは瞬きならぬ早業なり。討殺されたる兵共喚いて懸れば牛若丸。ものくし棄武者共一人も餘さじと。獅子奮迅虎亂入飛鳥の翔の手と掻き。隠れ現れ陽焰稻妻水の月手にもたまらず防る。雷玄頼方左右より隙間なく攻ければ。華表ののさ木に飛上りうらうくと打笑ひ。なふ追手の人々其方は大勢味方は僅三騎なり。暫休み申ぞと左り煽て在しける。頼方急つて煽けども爲べき様のあらざれば。遠矢に射取と打つがひ。よつ引てはたと射れば傍なる松にひらりと移る。二の矢と放せば心得たりと元の鳥居に飛戻り梢の猿の枝移り振舞の如くなり。雷玄今は堪り兼愚僧が思案候

へば。鳥居も秘も搦倒さんと土民の家なる蹴追取り。柱の根際に打立る牛若のさ木に兩足おけ。宙に下つて雷玄が眞向としたのに切給へば。南無三方と逃て行く。續いて飛とり取て引据。御坊にくさい教なれども釋迦に經と言ふ事有り。生て恥と洒さんより牛若が引據にて。成佛せよと拜打頭よりひつしき迄左手右手へぞ捌ける。大將頼方怒と爲し。女わらばに是塵途切立られし口惜さよ。一騎も残らず討死せよのれやのれと恥しめられ。むらくと寄懸る夫こそ望む所よと。又三人が引返し捲り立く息ども次せず追立れば四十余人獲伏て生獲る者迄も。半死半生叶じと田村川に飛入く。浮ぬ沈みぬ深ひける。牛若御覽じてお、面白しく。人笈ごさんなれと三人手に手と取くみて。流る、武者の頭と踏。肩と踏へて。飛越く向ふの岸に駈上り。骨折く御辛勞。關東勢と引卒し重て一禮申べし。門出よし吉凶よし天氣もよし道もよし万世の中義經が。天下と治ん瑞相と悦び東に下らる。

第五

君が代は千代に八千代に榮へます。豊旗雲や伊豆の國經が小島におはします。右兵衛の位

頼朝は盛長一人配所の伽。密に平家退討の御企類にて。關東の諸大名内々志と通じ参らすれば。願て武運も開くべき替める花の匂ひ有り。然る所に上方より澁谷の金王參上と申ける。頼朝悦び珍しや金玉丸汝は法休しけるよな。法名は何との言ふとの給へば。さん候昌俊と申名乗字と其儘に土佐坊昌俊とついで候。して上方に別條なきの。九郎は如何にと仰ければ。土佐坊承りされば候上方は平家の驛番十分にて。こはるゝ水の源の君御出世と松の葉と万民祈り奉る。御舍弟九郎殿も御供致せし所に。幸なれば伊勢大神宮へ御参詣有るべき由。拙者は君への傍土産に生着と持参致せし故。損せぬ内に一刻も早く御覽に入べき爲。先御先へ下つて候と申せば我君も盛長も。土産の肴は何ならん疾々とぞせめ給ふ。近比輕微の至りながら。のまの内海大綱にて取漏したる大悪魚。御賞翫遊ばせと長田の庄司と引出せば。頼朝大きに御悦喜あり。父義朝の命と取し北まぐらの毒の鱧。今我爲には目出鯛く釣た所は心地よしと咄と哄さ給ひける。時刻移さず料理せよと御長刃と賜ければ。承ると土佐坊長刃取のべ小踊して。首ふつゝと播落し宙に上てちやうど受け。切先に貫き見参に入奉り。骸は島の水底にふし付にせよやとて。下部に下し行はれ御悦び

は限りなし。此事北條へ聞へければ時政の北の方より女房達と使にて色々の絹八重がさね御祝儀に進上有。頼朝御覽と時政夫婦の志返すくも嬉しさよと。若松摺たる小袖と肩に打らけおはしまし。鏡引寄せ我御顔。つくくくと打視り。抑某清和天皇の臺と出。六孫王經基より滿仲頼光に相續いて代々天下の權ととる。我其血脉と續べさ人相尋常に變りてんこのの生れ有り。双の眉は八幡の八の字兩眼の八見には月日の光。額の黒痣は屬星木曜星。頭の辻には天照太神五体と守護しおはしまし。一度天下の將軍と仰るべき相現れたり。如何にくゝとの給へば土佐坊と初め使の女房若黨等。實も仰に違はじと一度に頭と傾けける。盛長は返答なく事笑しげに顔しりめ。空嘘いたる其風情鏡に映れば頼朝氣色と損じ。後ぎたなし盛長只今の類つきは。全く頼朝と侮つての振舞近比奇怪千萬なり。左程翻みなき頼朝に仕へんより頼ある人に奉公せよ罷立との給へば盛長涙とはらくと流し。こは口惜き御誼や候末頼み有る主君とて御奉公仕ると。忠節と思召さるゝの頼なき主君と守立て。忠と勵こそ臣下の道とは申べけれ。然らば君の御心には頼みなき下人として見放し給はん恨しさよ。其御心ゆへにこそ源家の嫡流として。平家に世とせばめられ。悵憤き配所

十鈴川に立浪の音も静に君が代と。千代万歳と守らせ給へど八拜九拜爲し給ふ。然る所へ盛長は。關東勢と引具して御迎がてら參宮の望にて。夜と日に續で参りしとさゝりいて來りける。牛若御喜悅ましくて。兩宮の御師と召し太々神樂と捧げらる。神も納受ましくけんしやだんの屋根に三光現はれ。音樂噴噴の濁と清め。辰巳の方の神杉より源氏の白旗雲となり光と添てたなびさける。人々あつと禮拜あれば旗雲の中より。伊勢岩清水住吉の三社の御神ありくと現じ給ひ。神は神なり神人と離れず。誠と以てやどりとす。神は人の尊敬に依て威とまし。人は神の恵に依て運と添ふ源氏の末は万々歳。五穀豊饒民安全。國土豊に守るべしと彌陀釋迦觀音三体の。御本地と現し給へば牛若歡喜の思ひとなし。百拜千拜幣帛と翻へす小忌衣。東の勢と催して怨敵と追伐し。源氏繁昌國繁昌治る御代こそ久しけれ

源氏烏帽子折終

蟬 九

近松門左衛門作

初興行元祿十四年五月六日作者四十九歳
 諫鼓音深ふして鳥驚のす。刑鞭蒲朽て笠空しく去るとは。今此時よ秋津君延喜の帝の御盛徳。申すもかさく有がたし。治まる國や民草の猶其榮へ衰へと。直ちに敵覽有るべしとて。唐土のせいたいの巡狩になぞらへ。交野のみ野の櫻狩今日の紅葉ととりはへて。月卿雲閣供奉せしめはや警蹕とよばふなる。御狩車のあつとも五ツの常の道芝や。惠の露に露さて御幸有こそ目出度けれ。さんやと過ぎて波濤院。殿が門田のやつが穂に籠の煙りはのくと。戸さぬ御代の民百姓くはんやくの聲うばうのび。欣々然と悦びて君が御狩と待顔に。空飛ぶ鳥も御車に群り慕ひ囀りしは。實に賢王の慈愛鳥獸にも通じけん。民安全のまゐるしなり。時に行く手の松が根に幼なき者の泣く聲す。藏人と以て召るればまた乳はなれぬ捨子なり。主上御涙ぐませ給ひ。我國民と憐み育むといへ共。子と捨る邪見の者我國に有る事。朕が不徳の誤りと忝けなくも兩眼に御涙とばらけ給ふ。然る所へ十八九なる女房おはたしく駈來り。なふ其子返させ給へ返し給へと泣き叫び。まつたく捨子に候は

ず妻は老母と持候が。今は老きのはも落て。物參らせん様もなく乳房とふくめ養ひ候。此子が争ひひつゝる故暫時外方にすのし置て候。聊捨は致さぬなり返してたべとぞ泣き居たる。主上御手とはたと打ち。扱は拾子にてはなりのりしな。子にのへて母といたはる孝行賢女とも云ひつべし。して汝は夫は無か。さん候夫は去年の秋霧と消へても殘る佛の。形見は此子と斗りの涙もいづれ由あつて。目元のくらむ爪はづれ青床敷女なり。主上感じ思召し中納言希世と召れ。窮民と養ふの昔の道。彼が老母諸共汝に預け與ふる條。大内に誘引しよく／＼養ひいたはるべし。ついでに斯る豊年の悦び天にうたふる兆ぞや。初菊の宴と催し。紫宸殿にて音楽と奏し五穀豊饒と祝ふべしと。世に畏る御勅宣仰ぐもれるるなりけらし。初霜と初霜にふらばやとらん花の宴。菊見の御遊糸竹の其役々と別たれし。中にも當今第四の御子蟬丸の宮と申せしは。天性美男の御器量天皇御寵愛淺ららず。琵琶に妙と得たまへり。扱又琴は蟬丸の北の御方と定めらる。るも此姫君は右大辨早廣が妹にて。はや十八の秋風もふさがで通す振袖や。二ツちがいの爪琴は似合比とのしらべや。月出なば管弦と始むべしとの御沙汰にて。衛士は烏帽子と傾けて月待の程の篝火も。ゆうに目

出度き景色なり。蟬丸は唯一人月や出しと欄干の奥の渡殿見たまへば。琴と枕に女のね聲斯くこそ語り出しけれ。もふべくのわが涙川。もしや逢瀬の波枕。それと頼みにうき身とおくるる。此年月とる。宮齋さば覽あれば北の方にておはします。お傍によりて是々今夜の管弦はれがまし。琴と枕の假寐は調子もや狂ひなん。誰の有るそれ／＼との給へば。はつとこたへて女房遠御枕參らす。北の御方つゝと寄り宮の御太刀すばと抜き。御長杖引よせ二ツに丁ど切り給へば。宮は驚き縋り付こはるもいゝに狂氣のと。呆れ果てぞおはしける。北の方聞き給ひ全く狂氣に候はず。お主様と自は夫婦と成て二年の幾夜と重ね候へ共。あはぬ縁のや但はお氣にいらざる。ついに一夜も肌ふれて枕とのはせし事もなし。釋迦でもさうはならぬ物。男持たも名斗りを益もなき長枕。科はなけれを成敗と恨み詫つゝ泣き給ふ。宮うなづのせ給ひ。恨み左もあらん云出すべき折もなく今までは打過し。親の命をむられず夫婦とは成りつれど。我幼少より出家と望み一生不犯の願と立て、佛に誓言たてしもへ是非なき事と断念たまへと。共に涙とながさる。北の御方涙と止め。扱は左様に候の然らば妾も出家ととげ。此世はわづの永き世の心が誠の夫婦ぞや。今よ

り自ら誓文立て互に心と耻ぢしめて。身と汚さず清浄に目出度く發心とげ申さん。しのし
 今宵は誓文がため一世一度の色床は。佛もか氣のととらめと膝にもたれての給へば。さす
 が甞る、花すゝき詞に露と暮はせて。籠中ふらく入り給ふ。月のあらぬの茜さす衛士は箒
 と焚きさして。さめくくとぞ泣き居たる。蟬丸御覽じ。目出度き御遊の折うら希有の落涙
 。心得がたしとの給へば。烏帽子のなぐり是御覽せなふ御見忘れ候。我は一年春日の里
 にて假寝のお情候ひし直姫にて御座候。有しあふ瀬の川水のよとみくく月あさなり。君
 の御子と生み参らせ。不思議の事にて御父帝様に老母諸共拾はれ候へ共。君の浮名と憚り
 夫は死せしと偽はり希世の脚ふ侍のれ候が。せめてお姿見まはしく衛士の男に出立し。逆
 もいやしき此身にて添ひ奉るは叶はぬと。血判と染て給はりし摺紙も今はよしなし事。只
 今やさすて奥様とはおなうよし野の初櫻。火花も薫れとにほひ炭くべんと爲しと引留め。
 明暮忘るゝ隙もなく乳人の清貫と尋ねに出し。出家の望みと偽り妻の傍にもぬる夜なき。
 我とばひげに此摺紙灰になせとは曲もなやと。うち給へば直姫も袂に抱きつくば川。積
 る懸しと逢ふ時は心かくれに胸さはぐ。そゝるふるひの姿なり。爰に北の方の御せうと右

大辨早廣此跡とさつと見て。今宵の衛士は蟬丸密通の女なり。あれ吟味せよ官人舎人我も
 くんと駈出る。聲に恐れて人々は築地がくまに遊給ふ。早廣摺紙と拾ひ取り。さあ証據は
 置つた奏聞せんとひしめけば。人目も耻す北の方なふはしたなし宮の御名の立つ事ぞ。穩
 密にしてたべ兄上様と涙にくれての給へば。早廣眼に角と立。言甲斐なし結構だても事
 による。宮と聲に持てこそ一門親類榮花もあれ。兄が鼻迄ひしぐるゝ夫と寝とられ口惜ふ
 は思はぬ。これ証據と見よと誓紙と出せば。北の方披見あり宮の御手跡紛れなし。くは
 つとせき立顔面に血筋は眞紅のあみとはり。髪さうしまに立のぼり噴毒の身ふるい齒とな
 らし。たらされし口惜や。恨めしや妬ましや思ひ知らずや此恨み。思ひしらせん思ひし
 れと。天地と睨む兩眼に血の涙とはらくく。はら立やとずんくくに喰ひ裂きすて。衛
 士の焼く火はもののはの胸の煙りはくるくく。狂ひわななき出給ふは恐ろしくも又憐
 なり。いでや其頃蟬丸の御乳人左衛門督清貫は。直姫と尋ねんため南都と忍び巡りしが。
 一まつ都に歸るさの長池より日はくれて。物すさまじき宇治橋の宮居にころは着きにけれ
 。今宵はこれにて明さんと笠と取て向ふと見れば。怪しき姿南無三寶。此社は嫉妬と守る

はしひめの。丑の時詣でこれなんめり。窺ひ見ばやと神前の松の古木に攀躡り。身と細めたる振舞は宛然梢にさゝがにの

さふぬ詣で

雲の井にわれたる駒は繁ぐとも。ふた道のくる仇人と思ふはつらし思はぬも。まものうしの時参り。仇と情と怨念と三の鉄輪に燃る火に。噴毒の焼木こりもなく煙りくらべん夕闇の。空もとろくに淨舟のけうとく立し宮柱。人になつけのつま櫛も。おどろの髪も。七つ八つ夜半の鐘の物すこさ。心にこもる願事にあまのさのてとうつてうけへば。願あらんあらし〜〜恐ろしや。心の角の枝高きうげるふの森味爽し。淺くな明を朝日山。山吹のせに影見へて峯のいなづまら〜〜。星の光りうら、燈火の幢れ出る我魂の。實にや外面如菩薩内心如夜刃。たとへ其色白くとも無間の猛火に黒むべく。涙に戀に紅の初踏したさ。闇より女心の倉橋山。ぐら〜〜。薄き返り。玉ちる川瀬浪の音。梢と渡る小夜風。さう〜〜さら〜〜とう〜〜。とんとると〜〜と踏鳴し。世と宇治橋の橋姫の宮居

と拍き祈りしは身の毛彌立斗りなり。清貫今が見始め何とやら氣味悪く。枝や取付き見る所に又向ふより全じ姿の人影見ゆる。さ。是も丑の時さて澤山や天狗の所爲。但狐や魅しぬと睫毛と濡して居たりけり。二人の女も見交して互にぞつと仕たりしが。初の女小聲になり。なふ和上臈は何人ぞとあれば。左言ふ御身は何者ぞ。御身にうはらぬ姿なれば祈りも全じ嫉妬よの。されば我も怪氣ごと扱も世の中に性のよき男はなま。扱々合たり叶ふたりいざ立ながら怪氣講とはじめ。語りてうさと晴さんと先傍に立寄れば、清貫恐るも打忘れ急な所の怪氣講と。可笑さうも耐られずふつと吹出す斗りなり。扱も妾は女院のうへわらばせせと申す者なるが、及ばぬ戀とは申ながら幼き時より蟬丸様に思ひとらけ、斯くと口説申せしうは一夜は思ひと晴させんと、堅き約束候へ共與様せいたうつよきにやお約束も夢となり。一人焦れ死なんより斯く祈り申すと。云ひもあへぬに初の女我こそ宮の北の方。妾と恨むは御事ぞ。直姫と云ふいたづら女郎ゆゑ自ら拾られし。憎い奴は直姫と牙と鳴して語らるれば。清貫聞けば余所ならず肝と潰して居たりしが。ばせと手と打扱與様知らでお恨みやたり、戀の敵は直姫一人いざ打殺し共に本意と遂げ申さん、尤と神

木に立並び。鬼とも蛇ともなし給へと肝膽くたき釘取出し。これは直娘が兩眼にうつ釘早つみれよと丁を打。これ首の骨胸板五臓腐れと碯と打。四十四本の釘の數筋骨節々つがひく。打て思ひと晴せよと踊り上り飛あがり。てうくはたぐ丁をうては。釘目より血ながれて左しもの大木動ぐにぞ。清貫もゆらくと漂ふ舟のごとくなり。餘りゆられて目眩き枝踏外しとせうと落ち。二人は驚き飛で通ると北の方の小腕とつて立歸れば。その隙にばせとの前行衛も知らず逃げ失せけり。清貫今は堪られずこれ御臺様。人にころよればしたなき御振舞。明の先にさあお歸りと申せ共。聞き入らず人に知られて此大願。空しゐるとも一念は死して報ひと知らせんと。戀に浮名やたればなの小島がさきは大紅蓮。逆捲水に飛入て哀果敢なくなり給ふ。清貫あはて松明くと云ふ聲に里人をも。松明灯燈星のごとく愛のしことぞきよめさける。時に小波岸とたゝきあらしや北の方の遺骸むつくと起上り。角は忽じやしんと成り鱗と振ひ炎と降らし。浪と蹴たて、捲上り鳥居ののさ木よくるくく。くるりくとひんまといひ。虚空に向つて吐く息は只火の雨の如くなり。人々これに恐怖れわつと云ふて逃げ散れば。大蛇は川瀬に飛入て。生のはり死のはり世々生々

に恨みと爲さん、あら恨めしや口惜と。云ふ摩斗り水底のうこはのとなく流れもく。宇治の川霧たへくと明行く空と消へてんげり。おそろし、凄じ、尤も果敢なし哀なり。さて戀路は切なるおもひぞや

第二

愛も戀路に名と立し情の時程近き。木橋の里の片傍に千手太郎忠光と云ふ者あり。元來勇々數弓取成が今浪人の身乍らも。飢す凍ぬ道芝の庵明暮殺生と樂み。尾花鞆に弓取添へ今日も狩場に出にける。深草山のすゝ原より兎一疋追出し。弓矢取て打刺ひ弓手もぢりに放つ矢と。手先さがりに射損じて誰が刈積し稻村に。別刀込てすばと立兎は逃れ失にけり。弓矢入幡射損せし。いで矢と取らんと稻引退ればこは如何に。甘斗の殿上人二八余の上臈の。左の袂に矢と受て涙に慕御在ます。忠光はつと驚き知ぬ事は是非もなし。見奉ればげしうは有ぬ御有様怪しや語おはしませ。我は當今第四の宮蟬丸と云ふ者よ。是成女は直娘とて踏も恨はぬ若草に。妻もこもれり追風の追手も急に來るべし。万事は頼むと宣て又

御涙にむせ給ふ。扱は蟬丸の宮にてまします。某は千手太郎忠光とて古は掛敷にも
乗し者。殊に某が妹は女院様のお末の奉公仕る。然らば大内縁と申し敷ならぬ某と。斯る
高位の御願一命も惜らさず。父は千手入道とて年罷奇たれ共。甲斐しく覺の者。一先
私宅へ御供申子細は靜に承はらん。去來させ給へと云ふ所へ。右大辨早廣兵杖三三才彼
處と搜索し來り。彼れこそ蟬丸直姫と擲捕れと喚て懸る。忠光面に立墨り是くくく
扱方々は退手よな。宮の御誤は卒知らず。某は千手太郎と云ふ者よ。荷くも頼れ參らせし
とうく歸れと呼りける。早廣大きに怒り。宮は不義の誤り故召捕との勅諭成が。輪言に
立つくは扱は已めは朝敵と云へば。いや朝敵にもせよとん敵にもせよ。武士の一言輪
言より重し。頼ると云ふのらは命は君に奉る。悪く倚らば蹴殺さんと力足とどうぞ踏む
。早廣怒て何の二才奴討取れと群り掛と飛退り矢束くつろげ矢續早。差取り引詰め空矢も
なく雨の如くに射懸れば。早廣も叫はじと皆散々に落失けり。左もさふす是迄と。直姫
と肩に掛け。宮の御手と引參せ。已が宿所に歸りける。既に其日も。暮過て左衛門の督清
貫は。蟬丸落失給ふと聞さ京近邊と尋廻り。木幡の里に着けるが草鞋切れて行暮し。村雨

しきる今宵も宮坐ます共知ばこそ。千手が門の茅葺に晴間と涙ぎ立れけり。雨にこもれ
る夜半の鐘霧の絶間と透し見れば。女家の振袖も最忍びたる氣色なり。木影に立退見給へ
ば。彼女門の扉と忙しげに物申さんとぞ叩きける。千手親子はすは退手よと走出。夜中の
案内何者と云ふ。なふさの給ふは兄上の父上らばせとの前にて候が。傍輩の隣に合御所と
紛れ出し。爰開給へと云ふ聲に母は驚き。扱は我子の懐しやと聞んとすれば。父の入道ア、
驚く。大事は油断より起るぞろし。宮と隠匿奉り。夜中に門と開ん事不覺の至り。是々ば
せと子細有て夜中に門と開く事は叶はず。今宵は夫にて明せ明なば内へ入れんとあれば。
こは心得ぬ仰うな如何成憎み候ぞ。是非開て給へ開給へと掻口説てぞ歎きける。いやく
憎しみはなけれ共。今宵門と開きては親兄が侍立す。子細は明朝語るべしはや夜明迄程も
なし。是と片敷明せとて内より。小袖と投出せば。ばせとは力なくくも衣引被ぎ臥居た
り。清貫ばせと聞くのらに。彼奴こそ彼丑の時参りござんなれ。大内の有様尋んと徐り
くと傍に寄。作聲して申と云ば、恐と云逃んとす。く是々苦めらす。我は田舎の旅人
成が雨と凌て罷有承れば大内方の人様とや。拙者共は田夫野人の遠國者。殿上の交際夢に

見た事も候はず。國元の土産に語り聞させ給へと有。ばせと打笑ひ田舎のお衆は何も左様にの給へ共。さして變りし事もなし。糸竹詩文和歌の道。取分流行は溜事と。莞爾と會釋し申ける。清貫伴爲た顔付にて。野でも山でも廢らぬは戀の道。定めし上臈様もさう仕た色の候はんさあ〜聞たし〜と。云へば。一樹の宿も多生の縁と包まず語る無心さよ。耻し乍ら自らは。禁中一の美男蟬丸様に思ひと懸け。様々心つくし舟引手數多の殿なれど。酒の一夜の珠燦れ轉び寝んと約束と。由なき女にさへられ遂に思ひの晴間なき。涙の雨に身は朽る。念力岩と通すとの壁に偽りなきならば。死る共生る共此無念は晴すべし。面伏口惜や。やよしの間はす語り穴賢て人にな洩し給ひと。又ひせ返りせき上し袖は。時雨に争そへり。清貫篤くと聞らになふ恐ろしの一念。終に蟬丸直姫の仇とあらんは必定。如何成事とら仕出し御命に障碍あらば。後悔に甲斐あらじと。近頃不便千万乍ら大刀抜潜めて取て引寄せ。心元と刺通すなふ悲し人殺しと。呼はる聲に親子の者門と開き飛出る。悪りなんと清貫は篠の小敷に走入り。暫らく潜みおわしける。母は絶りて悲しめば入道親子もはいまうし。盗人の所爲なんめり追駈んとは仕たりしが。宮の御事氣遣

しく立もやらす居もやらす。蟬丸も直姫も周章。狼狽給ひける。今と限りのばせとの前宮と情々見送らせ。苦しげ成息と次ぎ。夫成は蟬丸様直姫御前とは御身の事か。怨めしや耻のしや偽り多き御一言。誠と思ひ身と焦し戀に心と惱まして。有れぬおもひに狂ひしも只一心におもふゆゑ。君が戀路の障碍ならば。ともひ切れとはの給まはで。誰より殺さん御計策の。余まりに恥さ御心情の道は左はなきもの。なふ憎ふて人には惚れぬぞや果敢なの戀に朽果ん名こそ惜しけれ。去乍ら我里にお宿と召すも他生の縁。草の蔭にて君が爲悪のれとは祈まじ。詞の由縁と思しなば余の人千度百度より。君が一度の手向草露の命は惜のらす。なふ父上様兄上様。宮の御事偏に頼み奉る。名殘惜の母上様南無阿彌陀佛と。云ふ聲も眠れる花の夕べの秋。十七歳と一期として。終に果敢なく成にける。親子は夢とも辨まへず。絶り付いて泣ければ。蟬丸直姫聲と上去り迎は覺なし。恨と晴し免して吳よ不便の者の心やと。抱き付絶り伏泣と叫べど甲斐をなき。物の哀の限りなり。清貫案に相違して今は堪兼案内し。斯様〜と云ひければ。聞及びし清貫殿の先此方へと請じける。清貫人々に對面し。甲斐々敷も御隠匿我身にとつて祝者と禮義細に相述べ。先以て御息女

不慮の最期御愁傷察したり。去乍ら此敵は知れ申す。本望遂させ申さんと有ば。忠光悦び。夫は何國如何なる者にて候ぞ。此清貫こそ敵なれ。入道親子仰天し一圓に心得ず。何様子細候はん承らんと眉と擡て申ける。清貫涙と潸然とこぼし。有し段々心底と精しく語り。宮此所に坐すとは存せず。御行末の仇と思ひ不便乍らも討たりし。忠は返つて不忠と成仇は情と成たりし。短慮と云ひ粗忽と云ひ面目も候はず。今は恨みと晴給へと太刀と逆手にすばと抜き。既に自害と見えける時親子左右に取付き。なふ清貫殿我々も侍なり。一家命と抛の上はさもしく悔残るべき。大事と抱へて是式に死んとは頼頼し。但しは狂氣のさあ死なれふば死で見よと。様々宥め止むれば。思ひ切ける清貫も理に語られて死れもせず。生ても居られず殺しもならず。三人目と目と見合せて涙と流ぞ道理成。早東雲に及びし時右大辨早廣青侍ばらに物の具させ。直姫の老母同じく若君奪取り。陣頭に引立千手が屋敷と取圍み。御勘當の蟬丸と隠匿し段逆驛斜ならず。太平の君が世に事と好むは愚人なり。とうく蟬丸直姫と渡せ。異儀に及ば先一番に彼奴らと殺すと。刃と胸に差當て。さあ返事は如何に。と聲々に喚き叫んで呼はりける。忠光親子清貫も。人質に倦み果て。

左右なく切ても出難く。如何はとと暗闇で。兎角時刻延行ば。緩慢し軍神の手向草夫突殺して切入れと。痛はしや御老母二才の若君諸共に。只一太刀に害せしは目も當られぬ次第なり。天道知すの人畜奴。一人も脱さじと枕長刀追取伸べ。四十余人と左手に請右手に支へて戦ひける。千手太郎が手に懸て十六人とめければ。入道が長刀に八人懸てを捨てける。残る者も深手と負ひ颯と引ては又駈入り。二三度四五度搦立しに千手親子聲と掛け。清貫は在ぬ宮と御供申されよ。跡と掃なくと呼れば。尤と清貫宮と負參らせ已が館に落ちる。其際に早廣後の垣と押破り。直姫と引立大地に踏付拜打に振上る。南無三寶と入道横間に丁と受け火と散らして切結ぶ。太郎は父と討せじと討て懸れば入道隔て。父が命と庇保な姫君と討せなば。七生迄の勘當と云ふ聲に力なく。母と姫とと兩腕に振込で上の山へと落行きける。入道は面も振らず追行く敵と防しが。早廣奇て打大刀に弓手の肩先打込れ。七十一歳春の夜の敢なき夢とを消にける。忠光父は如何ぞと取て返して。マア。口惜や討せつる目前親の敵ぞと。退く敵と蓋に乗雲手に追立返返し。半時斗駈たりしが早廣は行方なし。無念口惜し已れ天地と出ずんば。討て父に手向んと。僅に残る雜人

共。木の葉の嵐磯打波。ひらくはつと追散し。父が死骸の薄煙霞の谷へと分入し。父、父たれば子も子たり。天晴勇々し頼母し。前代未聞の勇士やと扱は文にも。残し留めつる。

第三三

早廣が悪逆故宮は虎口の御命脱がれ。清貫が計ひにて中納言希世の館にお坐せしが。或時清貫希世参内あり扱も蟬丸の宮往時早月の頃より御眼病例ならず。唐の大和の薬と以て醫療手と盡しひへ共。元來宮の御事は美男目出度まします故。数々の女の思ひ嫉妬の恨み御一身に憑り醫術の及ぶ所ならず終に御兩眼盲させ給ひ。蒼天に月日の光りなく闇夜に灯火影暗き。盲目の御容体力及ずしと。詞と崩へ奏せらる。天皇はつと御氣色換り御落座させしが。誠に腰が第四の宮と生れ。十善の位とも知るべき身が。生れもつらぬ盲目と成し事。能く前世の悪業深きもへ五体不具にして佛には成難し。況んや此世さへ暗きに迷ふ盲目の。未來の闇も痛はしやと。良御涙に呉れ給ふ。よししく此世にて諸人に耻とぞん悔して。業障と果たし後世と助くるいとなみ。逢坂山に捨置べしと繪言有こそ哀なれ。兩脚詞と

崩へ言にては候へ共。しづ樵夫さへ不具なる子は愛憐し。況んや一天の若君と山野に捨て給はん事。且は仁心薄きに似たりと恐れ入て申さるれば。いやとよ生とし生る物子と憐れまぬはなきもの。況てや我が親心身にも換す思へ共。過去ふんくの悪業は十善至位も脱れずと。万民に知らしめて。天下の民と悉く。佛の道にいれん事。廣大の慈悲ならずや。子の愛憐きは盡せねど。國と育む我なれば。國民には換難し。擗て汝ら露程もいたはらば。返つて仇と成べきぞ。疾々山に捨置べし。果敢なの浮世や淺ましの人界やと。御冠の巾子と傾ふけて。御涙せさあへさせ給はねば。八省百官諸共に各々。袖とぞ絞らる。清貫希世兩卿も。力なく退出ある。世のならわしを定めなき。

蟬丸道行

結ぶの神も。偽りや。何時の月日に結び初め。寝初し夜半の夢消て。縁さへ薄きのら衣。御悼はしや蟬丸は。何の報の浮世の闇。懸幕の闇の暗がりに。引出す糸は昨日の。御車引のへて。野飼に扮す。綱手繩。御身に添ふる物とは。げんじやうの琵琶一面。清貫希世御供にて。萎れ出させ給ひける御有様ころ。哀なれ。秋さればく月の障得と

泣き歎きつる。東の山と超へ行き。今盲目の御身には。何の光りも水鳥の。加茂の河岸。波越へて。契りも木の松坂と消ばや爰に粟田口。秋未若き山々に。忍びくくの初紅葉。誰に着よとの錦織らん。折々に。花鳥風月の戯れも。共に散行花の山。鏡こうくくと仄聞へ。御心細き時しもあれ。己が夕べの床急ぐ妻こひ鳥二つ三つ。なふ四ツ五ツ五文字は。山の中山誓願寺。彼の神垣の年古し。天の帝の御廟のよ。左手の山の岡の邊と御手と取て教もれば。宮は左右の言もなく。世々の日繼の。天津君。民と恵みの言の葉の。露の流れと汲乍ら。成行果の淺ましやと。御涙せきあへさせ給はねば。清賀希世心なき牛も。尾と伏せ角と伏せ。涙と流す有様に。草木も哀備せり。秋の田の刈穂の原や風落て。腹が手枕寝亂れし。紙干す布干す米稻も刈干す。我は袂の乾く間も無るなないそ澤邊の蛙。斯る思ひはよも知じ。紫竹交りの藪の下。春の緑の咲いた妻。小徑廻竹行く袖に。簣着て通へ。笠着て又通へ涙の雨。雨勝り雨にはあらずや。是のさゝの。木木の木の葉が。はらりほろり。はらくくくと風に諸葉の宮所。今日と限りと伏拜み登り下りの旅人も。心々に今霄しも誰が誰と。伏見の山見へて彼の黄昏の私言。今日に浮ぶ種ぞろし。急ぐとすれど。

とけしなき生の玉簪遅く共。心の駒は日に千度懸しき方に走井の。永櫛の齒も能しや能し。何時と頼みにたはつけん我黒髪の寶桂。送坂山にぞ着給ふ。清賀希世兩脚は宮と木影に落し參らせ。宣旨黙止難く是迄供奉せしめ候へ共。何處に捨置申べき。去るにても我君は堯舜以來の賢王とは申せ共。現在御子と捨給ふ敬慮如何成事やらんと。涙に呉れて申けり。蟬丸聞召あら愚や人々よ。前世の戒業拙なくて盲目と成し故。去れば父帝の御情なきには似たれ共。此世にて因果と果し後世と助けん御計策。是ころは親の慈悲捨置歸れと宣へば。二人は滿涙と流し。此御有様にては盗人の恐れあり。御衣と給はつて簣と參らせ候はん。是は雨による民の野鳥と詠せし簣の。さん候雨露の爲なれば同じく笠とも參らす。是は見候ひ三笠と詠し物よなふ。又此杖は御道案内。實にくは是も突あらに千歳の坂も越なんと。彼の偏照が詠し杖か。夫は千歳の榮ゆく杖爰は所も送坂山。關の藪屋の竹柱斯る浮世にあふ坂の。知るも知らぬも是見よや。延喜の王子の成行果て。こは抑も如何成例ぞと。聲と上て泣き給ふ。宣旨なれば人々も。名残の袂振切て。涙乍らに歸らる。王子は跡に只獨り琵琶と抱きて竹の杖。伏轉びく去らばくくの聲斗。梢の木魂山彦と

。せめて夫のと方草分て山路に入給ふ。桂はみのる三五の暮名高き月に逢坂の。關の清水と聞へしは江州一の名水なり。されば關寺の稚兒達も。是と佛の關伽桶や初杓の露の玉禪。月と汲んと秋に澄む清水が元に出らる。時に柳の木隠より若き女の走出。石と袂に拾ひ入南無阿彌陀佛と云ひ捨。既に清水に飛入る所と稚兒達引留め。法場第一の靈水にて捨身思ひもよらずと有ば。いや迎も存命果の身ぞ。御慈悲に見逃して死なせて給と振放す。是々。左程思ひ詰しには子細こそあらめ。品に依て兎も角も先鎮靜て語られよ。平にくと申さる。彼の女顔打敵め耻し乍ら自らは。此山お捨られ在します蟬丸様の思ひ者。直姫と申す者成るが御行方の懐しく。是迄彷彿候へ共御在所も定ならず。人お尋て候へば御身の不具と含羞て。人に面と合せじと山深く入給ひ。今は生死も知らざると聞くより浮世の頼みも切れ。此清水とば三瀬川逢瀬と急ぎいぞ。早々死せ給うしと又潸然とぞ泣居たる。稚兒達聞き給ひ。扱痛はしや我々は此關寺の稚兒成が。山踏の行法には在所は存じたり。餘所乍ら見せ申さん。去乍ら。人音すれば逃隠れ給ふ間必ず聲ばし立給ふな。只は妾と見る迄ならば去來一案内申さんと。夕の雨にさす笠や空も涙も定めなき山路成らん。

第一第二のけんはさくくとして秋の風。松と拂つてそいん落つ。第三第四の宮は我蟬丸が調べも。四の折柄なりける村雨のな。流るゝ水の哀世の。其理も目に見ぬ。月の入さる知されば。夜盡わらん方もなく谷の鼻關子鳥梢と渡る脚や何と恨みて猿鳴く。落葉衣に露重く。月と荷に肩瘦たり。移れば變る哀さよ。去ればにや。夕日の巡る方とこそ。都の友と招く手に其方の風懐しく。又森々たる。野分に琵琶と弾じては。過し寢覺の忘られず。鹿の妻こふ聲迄も。御身の上と無情なし。正木の藝青萬葉。來人有共知り給はず。楨や柏と押分けて杖が枝折の崖傳ひ。隠ひ迎らせ給ひける。姫は彼れよと見るらに契りし人の涙かしやと。超り寄らんとせし所と。稚兒達押へて音高し。人音すれば逃隠れ給ふ故物音事は叶はずと社最前より申つれ。只音せでと有ければ。姫は陰方涙に曇る鏡の影の我戀は。逢とはすれを物云はぬ。我山梔の色香とも。見すや知らずや淺きしやと。聲とも立す忍び音に障返りてぞ泣給ふ。宮は斯共白糸の琵琶取出し。盤渉とへうでうに調へ換へ。やよや待て天津鴈金言傳ん。古郷の秋は如何ならん。我は深山に住託て琵琶より外は友なしと。撥とわけ給ひし時。風が持て來る村雨の紅葉運しと夕時雨。一むら颯と降來れば蟬丸琵琶

芭と濯ざじと。此所の木の下彼所の木影。濡ても寝んと詠せしは。花に戯れし歌の体我は
 又賤の夫がノ、櫛ぐ袖笠脇笠の。雨に木の葉も亂る、初時雨。彼方へ走り。此方へ走りさ
 らりく、さらく、と。駈り彷徨ひ身は濡衣。木影なければ雨も堪らず。人々見る目も痛
 しく少小高き崖影より。笠と密と指懸れば。宮御耳を故て、不思倭や雨は降乍ら身に掛ら
 ぬは木影よな。口惜や古へは。一夜泊りし宿迄も錦の座褥綾の床。垣にさんくはとけ戸
 には水晶と列ねつ。懸輿しよくしやの玉衣の隙間の風も厭ひしに。斯淺ましき苦席。敷
 とも敷じ世の中よ。思ふ人とし片敷ば。玉の臺も思しき。斯とは知らず直姫が哀何と暮
 すらん。戀しの昔や忍ばしの直姫やと。盲目の悲しさは傍に有共知り給はず。獨言たき聲
 と上敷き暮はせ給ふにぞ。今は堪兼心消へ直姫愛にと云はんとすれぞ。稚兒達暫しと留む
 れば。絶入り消入り伏轉び身と悶へてぞ慍る。神ならぬ身は是非もなし。良有て蟬丸毘
 琶も撥るのらりと捨。南無三寶叶はぬ事に迷ふたり。逢は別れの始獨止まる道ならず。色
 も匂ひも一盛り、思ふまじ敷のじと。一首の歌に斯計。是や此行も歸るも別れては。知も
 知ぬも逢坂の關。明日に別れ夕暮に。逢坂山の旅人の往來も夢の遊ぞや。雨降は降れ風吹

ば吹け。山の興こる住能れ。浮世の無常今ぞ悟の花開けしと。走り出んと仕給へば。人
 を岸より飛でとり是直姫よと縫り付。宮も是はと斗にて互に手と探袖と取懸し床しの物誌
 盡せぬ物は涙なり心を思ひ遣れたる。時に兩人の稚兒達詞と揃へ如何に蟬丸。御身色と重
 んじ思ひに絆され情に沈み。餘多の女と迷せし。因果の霞心と晴まし盲目と成給へ共。今
 の悟の詠歌面白しく。三十一文字の面に旅の姿と列ね。内には則會者定離哀別離苦の理
 り。逢は別れの始と示し一首に三世と顯せり。神も心とたやぎて佛の教に逢坂のあの關
 寺の鐘の聲。煩惱の夢と覺すや法の聲も靜に。先初夜の鐘と撞く時は諸業無常と響くなり
 後夜の鐘と撞く時は是生滅亡と響くなり。じんであうの響きは生滅々爲。薄暮は寂滅爲樂
 と響きて。菩提の道も暗あらず。悟の夜半も明渡る兩眼は暗く共。汝月明なり。和歌の
 妙と授けん爲。我は人丸我は赤人二人の魂魄顯れ出。共に成佛得脱のとそつに生れん嬉し
 こと。言ふ聲斗は逢坂山。言ふのと思へば逢坂山の杉の嵐に。立紛れてぞ失にける。蟬丸
 あつと感歎あり。夫れ日の本は神國の。和歌と以て道とせり。歌仙の靈魂顯れ出。詞と交
 す其奇特未天道拾給はずと。感涙袖と潤はして扱直姫に逢事も。神の授くる縁ぞと各々沙

ると迎られて猶信心の和歌の道。深き例に踏分て。打連山路に歸らるゝ。夫婦不思議の契として。二度巡り逢坂山の。名歌は今に残りける。

第四

右大辨早廣は千手入道と討滅し。都の住も成難く遠國に彷徨しが。兎角我身上の敵は蟬丸なり。是非に恨と晴さんと下人等一兩輩召連。逢坂山の谷峯と草と分て尋れ共。宮の行衛は無りけり。後は小關藤の尾や斯る山家も住めは住む。奥の柴人友呼替し。是々逢坂山にて不思議の物と拾ふたり。抑何と云物ぞ。さあ推當に言て見よと琵琶の撥とぞ出しける。樵夫共集りて。姿は銀杏の葉の形にて偕る合點ゆるぬ物。是は猿の末廣の。否々天狗の弁ならめと。様々見違笑ひける。時に向ふの岡邊より若き樵夫の是と見て。やれ旁夫は此山に捨られ坐せし。蟬丸様の琵琶の撥と云物ぞ。賤き者の用には立す我に呉よと言ければ。として又汝は何に爲る。様子に由て遣んと云ふ。彼男聞きも敢ず。某は彼の志賀の里に世と免れ住給ふ。伯雅の三位と申人の一僕喜藤太と云柴刈成が。主君伯雅の三位殿は

蟬丸様の琵琶の弟子。其由緒にて此間。蟬丸様御夫婦共に旦那が庵に入給へば。捧申に是非く所望と云ひければ。扱はそうる持ても用なし勿体なしと。與へて皆々通りけり。早廣篤くと開濟し郎等に目配せ。喜藤太と四方よりばらりと取圍み是々汝が主人三位の庵に蟬丸の在るとや。さあ案内して連れて行け。否と云ば踏殺さんとのさど掛てぞ申ける。喜藤太さよとせしが打領づき。聞た已取等は強盗よな。已等氣色すればとて主の邊へ盗人の引入が成物の。下郎と思ひ侮るな四も五も食男でなし。足手息災な内早く歸れと怒ける。早廣怒つて夫引立て案内爲せよ。承はると下人共飛懸れば取て投げ。取付は踏倒し扱取仲打て懸る。早廣も扱合せ二打三打働さしが。山路に馴たる荒男岩共言せばこそ。猿より軽く駆廻れば。さしもの早廣詮方なく轉ひ轉んで逃落ける。喜藤太も是迄と元の所に立返り。何でも無い奴等逢ひあつたら汗と流せしと。柴に棒さしりさ荷ひ。鼻歌謡ひゆうくと志賀の里へと歸ける。左衛門督清貫は宣旨とは云乍ら。御幼少より仕にし。宮と山野に拾叁らせ無情世に墨染の。袂に俏扮國々修行念佛他事もなし。去れば古郷忘れ難し宮の御上如何ぞと。都に歸る謎や滋賀の浦にぞ着給ふ。古き都の所ら花散里

の環園ひ。槍垣透垣小やりに最もへづける庵有。立入見れ共主人はなし持佛の香華細のに
 持經禮讚繕はず本尊も昔し覺へたり。如何成道世者の住家ぞや。世と厭ふ身は誰とても
 斯こそあらま欲しけれ。住持の歸さと待請け一夜語りて通らばやと思ひ椽に腰掛待居たり
 。時に佛壇の下より。女の聲にて申々と呼ぶくる。はつと驚き見ておれば。忍やりに戸と
 開て雪の様な手と出し。やよ是水一つ給べと云ふ大道心の清貫も是ぞ化性の業ならめと
 膝慄慄と震ひしが。不便や餓鬼道に迷ひし幽霊ござめり。是ぞ出家の役と觀じ。器物に水
 と入けざう三途飢渴飽滿南無阿彌陀佛と差出しちやくと手と引退りしが。又恐々立寄て密
 と覗ば。弓矢八幡籠の成女房なり。扱は御坊の梵妻よな。否はや淨世に扱目はなし。誰
 らは知ねど此庵の濡坊主。所ころ有れ佛壇に女寝させて私事。思ひ回せば可笑て獨笑ふて
 居たりしが。又聲立てあら心能や今一ツと差出す清貫も滑稽者。綿持の梵妻殿些拜み奉
 らんと。其手と取て引出し能々見れば直姫なり。扱は御身は清貫のなふ姫君のと手と打て
 互に。呆れ在ます。去共清貫不審晴す。何とて爰には御入と問ば直姫聞給ひ。去ばとよ此
 所は伯雅の三位とて宮御琵琶の弟子成故。扱妾諸共是に忍び坐ますと語り給へば。清貫悦

ひ宮は何所に渡らせ給ふ御目見得致たし。宮は御出世の御新誓に坂本の山王へ日参遊ば
 し。今日も三位と御供にて御参詣候が。追付歸らせ給ふべしと宣ふ所へ喜藤太立歸り。
 清貫と急度見て。彼奴も盗人の同類の油断は爲ぬと鎌取直すと。姫君御覽じやれ喜藤太彼
 れは宮の御乳人清貫と云ふ人なり汝は氣ばし違たるのと宣へば。扱はさうの御免く。
 拙者は山にて強盗に逢し故。扱只今の仕合と有し次第と語りける清貫情を聞給ひ。否々是
 は盗人ならじ早廣に疑ひ無。大勢備し此處へ押掛んは必定垣一重の庵室に長袖足弱過ち有
 ば後悔せいで山王遊姫君とも御供し。宮とも誘ない奉り一先都へ登べし。るれ喜藤太御
 手と引け暮ぬ先にと夕浪の。鳩の海邊と濱傳に坂本差てぞ急ぎける。爰に又千手太郎忠光
 は父入道と早廣に討せ。其無念晴やらす老たる母と肩に掛け。親の敵早廣と是非一大刀と
 心懸け野山に起臥し付狙ふ所存の程こそ理りなれ。時しもあれ志賀の里にて早廣と付出し
 。さあ今ぞ日比の運試し天の與へあら嬉しやと逸れ共。見れば敵は大勢にて群り來る。老
 母と何處に遠べきぞ。屈強の庵室御免と言ひ捨つゝと入。持佛の下段の戸へ押開母と忍
 ばせ奉り。あら心安や此上は庵限り太刃限り。身繕ひする所へ早廣主従七人にて。伯雅

の三位が庵とは是ならぬ。ぼつこんで討取れと云ふ程こそあれ。我先にと亂れ入る忠光戸口も立塞がり。千手太郎見忘れたる已れとこそ尋しに。神佛の宛がひ能も爰へ来りしな。親の敵覺へたると無二無三に切て懸れば。先と取れて動顛し驚へて懸と退きしが。踏止れば打のけ取て返せば切のけ打のけく息とも續ず。遁る敵にとつ絶ひ粟津が原へぞ追駈ける斯とは知で。伯雅の三位蟬丸の御供して清貫とは道違ひ。麓の田面下向道已が庵に歸りける。蟬丸仰せけるは誠は師弟の縁とて。此度の忠節淺からずと宣ふにぞ。斯る御用に立事生前の本望。先は姫君嚙ぞ御淋しく御心も盡ぬべしと。佛壇の戸と開御手と探引出せば。是は何じや。七拾有餘の老女頭の雪もみつわくむ。老衰ひて出てける三位はつと飛退けば。宮も驚きやれ何事ぞ氣遣し。さん候姫君俄に白髪の姥と成給ふ。今の間に年の寄るは合點參らず。是御覽せと御手と探り肌へと撫れば骨荒て。老の波立身の皺に瘦て色香も無りけり。宮も呆れて坐ませば。三位彌當感し。今朝程宿と出さまに確姫君と入置いたると存するが。取違へたる知ぬ迄と眉と。擧めて居たりける。痛はしや蟬丸は御涙とはらくと流し我此姿と成事も彼の姫故と楽しみしに。情も怒も覺果し天魔の所爲の冥罰のと。御

愁歎こそ道理なれ。老母は聲と聞覺へ御顔面とも思ひ付。なふ宮様の心懐のしや床しやと。纏り仕ば、煩さ。免せくと彼方へ邁此方へ隠れ百歳に。一歳足らぬ九十髪持扱はせ給ひけり。御荒く。名と申さずは御見忘れ候べし。妾はこる君が爲早廣に討れし。千手入道が後家忠光が母にて候と。件の有増語らるれば實にく夫れよ珍らしや。是はくと手と打て一先不審は晴しゆと直姫の行方なし最前の騒動に。敵や奔ひ取つると未だ氣遣堪へぬ所に。清貫喜藤太姫君と誘引し。宮に出逢ひ奉つらぬは道こそ違つらめとて。舊の庵へ歸らるればは清貫の我君。夫よ彼よと寄集り泣つ笑ふつ取りく語りひ供み給ひけり。然つし所へ千手太郎薄手少を受乍ら。大汗に成て馳歸り。人々と見るよりもつと驚き嬉しさに。左右の言句も出ばこそ夢のと思ふ氣色也。各々一度にやれく千手の忠光の。事の首尾は御老母の物語にて承るして先敵は討止し。さん候敵は大勢と申。長道に力盡き候と火水の底もと存せしゆと。母が有様氣遣しく無念乍らも打漏しとつて返し候幸哉此上は恐れ乍ら母と君に預け參らせ。心身軽くし罷り出敵と討て歸るべし。はやお暇とぞ申ける清貫聞も敢ず。すすし勇し御老母は我々預り。都一條大宮に坂上の姫宮

迎蟬丸の御姉宮在す。君諸共に此方へ伴忍はせ奉らん。是此袈裟衣は某が若用して君に
 巡り逢奉りし吉左右目出度と三衣也。貴殿に譲り申べし修行者に休と變へ。狙ひ寄て本望
 遂目出度歸洛せられよと。各門出祝るれば。有難し忝なし。此衣と給はつて姿と墨に消す
 共。心斗は染殘し彌陀の利劍と提さげて。誓は敵翼と生じ。梢と走り波と潜つて新羅百濟
 高麗國支那天竺に至る共乾坤と出すんば。よしや五年の十年も命終らば一念の魂殘つて本
 望遂げ目出度歸つて母者人御笑ひ顔見申ん。御身が笑ひも見せて給へ。お暇申す我君様服
 申て母上様。各には老母が事懸存するまゝくくをさらば。さらばと出て行花は三芳野人は武
 士譽は雲井に薫りける

第五

世の中は兎にも角にも假の宿。笠一本に起臥も身の程隠す我庵と。墨の袂に墨頭巾經論少
 を懷中し。父の敵と狙ひゆく隕患に我は迷へ共。人と導く六道の辻談義こそ殊勝なれ。誠
 に淺ましいな敷うしいな。今日の衆生一生垢惡不斷。煩惱の塵に交はり。朝に怒り夕

に悦び。貪瞋痴慢の色香に迷ひ假にも佛法と云ふ事と知ぬ愚成るな妻子珍寶さうわうる。
 りん妙徒時不隨者と申て。現世にて跋の山と築せ。子孫奴に侍のれ花に詠じ月に囀ふさ。
 無上の薬花と究むるといへ共。一足切斷臨終の嵐に貪慾食の火の車業しやうの雲に轟る
 さ誘ひ行とさんば。目埒の下人も従はらず金銀衣服も身につけず。無間奈落に眞倒顛に墮
 落事三つ羽の征矢より最早し。財寶は地獄の家産名聞は焦熱の爪木共磨へたり。叔如何が
 して各我等佛には成ぞと申せば。有難い事の。化城論品に曰く。大通智勝佛。十却坐道
 場。佛法不現前。不得成佛道。此文の心は一心の外も佛法なし。一心の外に成佛なし。
 去れば愚痴無智の凡夫心の外に佛と求め穢土の外に淨土と求め。却つて迷ひの種と爲す。
 是と和らげ傳教大師の。御歌に。悟とて外に求むる心こそ迷ひ初ける始成らん。又天台の
 釋文にも。法華彌陀眼目の異名連。釋伽と阿彌陀は譬へば目と云ひ眼と云が如くにて。一
 佛異名道一ツたい。心の外に來迎なし。坐がら夏も蓮華だらじやう。寝ても佛覺ても佛。
 立ても佛居ても佛。行住坐臥一心不亂に念佛せば己身の彌陀唯心の淨土なれば。心外無別
 法即心成佛。取も直さず居も直らず。十方偏照の光明と放ち。金色の蓮臺に駕せられ一瞬

刹那が其間に。忽ち安養無垢世界。舞臺快樂の都に至らん何疑ひの有べきと。四とん八へん流るゝ如く。語り給へば往來は皆々體して通り。右大辨早廣は丹波の方へ落行んと。編笠引こみ驛馬に乗り白川越に來りしが。傘にや恐れけん早廣が乗たる馬俄にけしとみ跳上り鞍と放れて動と落る。早廣怒つて是驅人奴。馬上にも用捨せず傘とひらめりし。落馬させつる奇怪と傘取たると吃度見て。親の敵早廣の千手太郎知つらんと。傘の轆轤と抜けば長柄に鎗と仕込たり。餘さじと飛掛れば南無三寶と馬引寄せ打乗。鞭と當て歩まする強者臆病者返せ〜と聲と掛け。息も續す追走しは只章多天の如く也。半道計退のけしが馬の足並早廣に十四五丁下り松の木蔭につゝ立。又走出んとしけれ共こは如何に足立す野山に伏したる千手太郎二三日五穀と食せず。咽渴して途々と一足も引ればこそ。冥加に盡きたり口惜しと齒咬と爲して立たる所に。賊に天の與や死人に供し。統付の供物松の元に棄て有。有難し幸と一口にぐつと喰一ゆり搦て力足と踏だれば。金剛力士の如く也。さあ千里万里も一飛と又走出し行水の神谷川にて程なく追付き聲と掛け。馬の尻が軟膏搦て突ければ。馬は堪へず崖破と伏す早廣下り立心得たりと。太刀と合せて防ぎし

が一念の鋒先岩と裂く勢はひに。左の肋と貫られ仰氣に返せばつゝと入。取て引伏馬乘に動と乗り。親の敵諸人の仇年來の恨み思ひ知れと。三刀四刀差通し、嬉し、心地よしと。嬉し泣に泣居たり。先母上に悦ばせ奉らんと。首掻落し鎗に貫ぬき振傾げ。蟬丸の在ます一條大宮坂上の館へ。飛が如くに急ぎける心の中こそ嬉しけれ案内にも及ばず。千手太郎忠光敵早廣が首取て参りしと大音揚て呼はれば。希世清眞宮御夫婦是は〜と走出。扱もお手柄〜と勇み悦び給ひける。此年月の難行又下り松にて餓に及びし時。亡者に供へし供物にて餓と凌ぎし有様具に語り。母に申て悦ばせん早々達せて給へと申せば。人々は涙ぐみ兎角の事も宣はず。こは心得ず如何成子細を聞させ給へ希世涙と止め今更語るも便なき乍ら。御老母の御事は廿日程以前より風の心地と候ひしと。醫療手と盡せし甲斐もなく。一昨日の暮方に終に果敢なく成給ふ。只今の物語り亡者の供物と食せしとは。それこそ御老母の供物よと語り敢ぬに忠光は。はつと斗に伏轉び聲も惜まず。泣居たり。心の中こそ無惨なれ最を涙に呉乍ら。借は亡母の供物にて我渴命と繋ぎ本望と達せしりや。草の影迄子と思ふ母の一念通じたる。親子の知遇の有難さよ。斯有べきとは存せし顔面と拜せ

んと。勇み歸りし甲斐もなき定めがたなの世の中やと。人目も別す聲と上口説立てを泣居たり。實に道理斷やと各袖とを絞らるる良有つて千手太郎、歎くまじや候。親兄弟が命と捨しも君と御代に立ん爲敵と討てひ上は只父母が教養には。君御出世の御訴訟こそ有ま欲ういと涙と止め申ければ。清貫聞も敢す我々も左は存すれ共。先々月より直姫御懐妊の萌し故。取紛れ延引せし急に奏聞せんと。評議區々成所へ姉宮搖出給ひ。千手太郎は御身の事の忠義感じ入てころいへ。妾は坂上逆蟬丸の姉成が。因果の不具に髪倒さまに生し故父帝にも嫌れて。斯る貧乏住居乍ら是は過去の因果なれば祈るべき方なし。又蟬丸の盲目は嫉妬に命と失ひし北の方の一念現世の報はありなり。殊に直姫懐妊とや。彼恨みにて生るゝ子も不具ならんは必定。もと北の方に怨もなければ科もなし。安居院の小聖と請じ。宇治川にて七々日魂しづめの法事となし。彼亡魂と宥めなば蟬丸の目も開け。直姫の平産も氣質美麗の男子ならん。とくくと宣へば皆尤と同じつゝ、小聖に御使者有。都の辰巳思ひ立つ日と吉日とぞ開闢あり。

懷胎十月の由來

宇治のあじろ水日とるさね。今日満願の大法事宮御夫婦は願主にて壇の左右に着座ある。大君御幸なりければ。洛中近國のくれなく。信心の參詣は老若男女貴賤都鄙。袖と列ねておびたゞし。斯くて安居院の小聖は役の行者の跡とつぎ。胎金兩部の峰とわけ七はうの露と除ひし襍掛に。不淨とへたつる忍辱の袈裟。知行ふとらぬ御弟子達左手右手に相供し壇上に差うゝり先加持の讃とを誦せられける。さん上さいはいく敬つて申す魂しづめ。それ無漏無常の法界には自他の念更になし。悟るとさんば十方空迷ふがゆるに三界じやう。喜怒哀だりに起つて哀樂是が爲に止む事なし。花と見よ雪と見よ龍田の錦吉野の雲。うのゝなれば夢も結ばず。水たまらねば月もやとらす。今ひるがへす幣帛にむじはんふしやうの風と招きて。めいもうのやみとはらさん。そもく行者が修法と云つは。初七日はまんだらく。二七日ははうじやうく。三七日には龍女成佛水せがき。四七日は光みやうく。五七日には妙なれや法華せんぼう。六七日は法よしのしゆり三まい。今月今日七々の大結願と申すには。姪婿安平子やすの法。今の御法に怨と忘れて應護の外皆とめぐらし給へと。

懐胎十月の十相と語り給ふを殊勝なる。先初月は一氣体中に孕まれ。其の形あたる鶏卵の如し。これ本來一とくの精水のたりに取ては混沌未分。名にとつてはたいげんたいそ神道にては國常立の尊と申奉り。あんじゆは天のせいみんとくだすと云ふ。佛法にては本宇の毘盧遮那。不動明玉の請取たまひて本來の空の一もつ是と云や。二月めには陰陽の二氣相化して一氣と成り。獨鈷の形とあらはるゝ是とたいしと名付けて。形のはじめりのつぎにて薬師如來の受取なり。三月めに至つて人倫の本身わたくしあく。始めて一念さす天竺の釋迦牟尼如來は佛といひ。唐土の聖人はめいとくと名付。我朝にてはしんりよと仰ぐ。名づくる所はへたゝれど三形一ちは。やこのくくくこのくく三鈷の形文殊菩薩の受取なり。はや四月めは地水火風の五倫悉くつらなりて。仁義五常の五鈷の形普賢菩薩の守護なり。五月に及んで六根手足とさいしき五体残らず連續す。此時よりその体に守護本尊定りて付添ひめぐる腹帯や。地藏菩薩の受取なり。六月になれば好む所欲する所自然に生じ。母の乳房にくひつきて親の乳と吸取る事。およそ三石六斗なり。則大悲觀世音是とすもらせ給ふとぞ。扱七月に至つては。忝なくも御佛は三世の因縁壽命と云んがみ。扱ころ

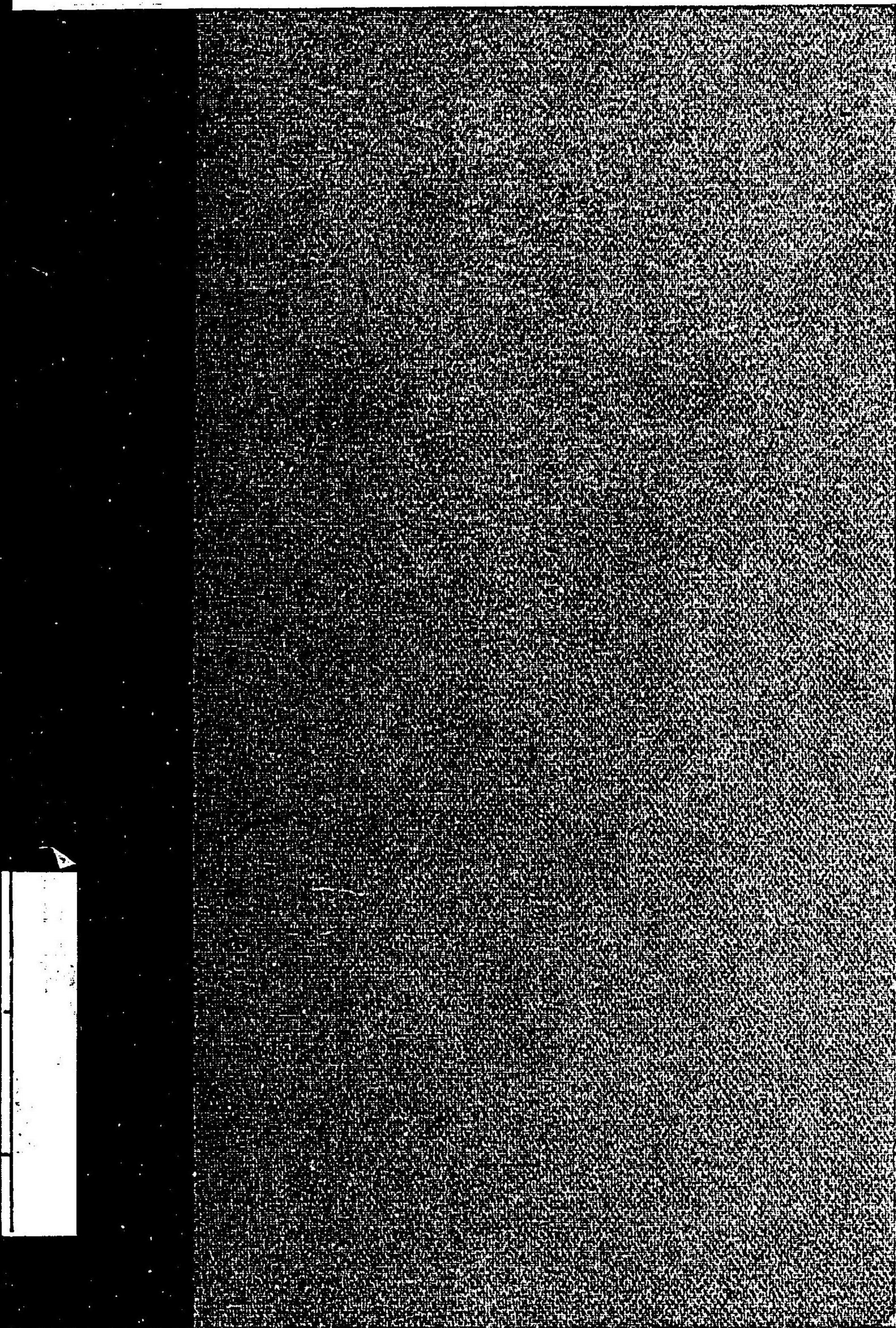
人間一生にめぐる因果の小事の輪の。りんぼうにささみ付うへにうつけ給ふと云や。彌勒菩薩の受取なり。八月めに及んでは阿修羅菩薩の守護にてりんぼう變じて人肥と成。九月には成長しいねんあるゆへ法界の惡魔惡れう。毒氣と吹き入れ吹きかけ吹きこみ。此界に出生せば已が魔道へ引入れんと隙間と狙ひ窺ふなり。父母の所行所念に引れ善となせば善人。惡となせば惡人と成り。極樂地獄の堺ひぞとて産神と定めおき勢至菩薩の守護なり。當る十月は愛染明玉。されば六道四生廿五有の其中に人よりも尊きなくのいぶつしやうと備へたり。彼も我も一佛一体汝が怨念消除みぢん。もとの佛果に至りたまへ。おんあひらうんけんたら。たのんまんさうくによりつりやうと精々とぬさんでし。しめたらの聲も川風も天にひきて有がたし。時に不思議や神木の松の木の間。北の方の幽靈影の如くに現はれ。此御經にひられて五逆のたつた八才の龍女。共に佛果と受しぞや恨と晴れて今よりは。五ちの佛と成るべしとの給ふ聲も芳しく。如意觀音と現れ光りとはなつて失せ給ふ。此光明に照されて蟬丸の御兩眼。くはつと開けて是はくとの給へば。君臣上下としなべて悦びさめき給ひけり。扱小聖に御禮あつく御夫婦うちつれ還御ある。御子孫

○近松巢林子作淨瑠璃本既刊目錄時代物卅三種廿八冊
世話物廿四種十二冊（每冊定價七錢
郵稅二錢）

- | | | | |
|-----------------------------|----------------------------|-----------------------------|-----------------------------|
| 一 傾城反魂香 | 一 源氏鳥帽子 <small>九合卷</small> | 一 心中重井筒 <small>合卷</small> | 一 堀川波の鼓 <small>合卷</small> |
| 一 曾我會稽山 | 一 最明寺殿百人上郎 | 一 戀八卦柱曆 | 一 心中萬年草 <small>合卷</small> |
| 一 雪女五枚羽子板 | 一 遊君三世相 <small>合卷</small> | 一 心中宵庚申 <small>合卷</small> | 一 冥途の飛脚 <small>合卷</small> |
| 一 世繼曾我 <small>合本</small> | 一 碁盤太平記 <small>合卷</small> | 一 心中天の網島 <small>合卷</small> | 一 夕霧阿波鳴渡 <small>合卷</small> |
| 一 金平法問證 | 一 百合若大臣野守鏡 | 一 會根崎心中 <small>合卷</small> | 一 心中又水の朔日 <small>合卷</small> |
| 一 天智天皇 | 一 國性爺後日合戰 | 一 心中二枚繪草紙 <small>合卷</small> | 一 五十年忌歌念佛 |
| 一 十一一段 | 一 雙子隅出川 | 一 博多小女郎 <small>浪枕</small> | 一 長町女腹切 <small>合卷</small> |
| 一 日本振袖始 | 一 善光寺御堂供養 | 一 今宮心中 <small>合卷</small> | ○ 名家傑作 |
| 一 百日曾我 | 一 一心五戒魂 | 一 卯月の潤色 <small>合卷</small> | 一 大塔宮囃鏡 |
| 一 出世景清 | 一 傾城酒香童子 | 一 繪權三重帷子 <small>合卷</small> | 一 三世二河白道 <small>合卷</small> |
| 一 關八州繫馬 | 一 天神記 | 一 山崎與次衛門 <small>合卷</small> | 一 八百屋お七 <small>合卷</small> |
| 一 本朝三國志 | 一 信州川中島合戰 | 一 生玉心中 <small>合卷</small> | 一 末廣十二段 <small>合卷</small> |
| 一 吉野都女楠 | 一 津岡女夫池 | 一 女殺油地獄 <small>合卷</small> | 一 心中二腹帶 <small>合卷</small> |
| 一 姫山姥 | 一 天鼓 <small>合卷</small> | 一 卯月の紅葉 <small>合卷</small> | 一 井屋源六 <small>合卷</small> |
| 一 右大將鏡實記 <small>合卷</small> | 一 傾城吉岡染 <small>合卷</small> | 一 薩摩歌 <small>合卷</small> | 一 男色加茂侍 <small>合卷</small> |
| 一 唐船新合國性爺 <small>合卷</small> | | | |

2K-27

10



1954

1954

源氏烏帽子折
蝉丸
国立国会図書館

912.4

Ti238g

M

088225-000-4

912.4-Ti238g

源氏烏帽子折・蝉丸

近松 門左衛門／著

M29

DBI-0048

